實戰場裡のナチス(ナチス叢書14)

於田秋光著

戦場裡のナチス

陸軍大學教官
陸軍中佐
於田秋光著

ARS

實戰場裡のナチス

陸軍大學校教官
陸軍航空兵中佐
於田秋光著

ナチス叢書

アルス刊

責任編輯

陸軍中將 大島浩閣下・小島威彦

ナチス叢書刊行の言葉

支那事變を契機とする皇道世界維新戰の發展は、これに呼應する第二次大戰により、歐洲全土を獨伊樞軸ブロックと化し、この世界史的轉換は、まさに、英米民主主義共同戰線を結成せしめ、インド、南洋、濠洲、カナダ等全面に亙る對日封鎖陣を形成せしめんとする。

ナチス・ドイツは何によつて、かくも壓倒的勝利を獲得したか。これこそヒットラー總統が、日獨伊防共樞軸による、ゲルマン圏の確立によつて實現し得たものであり、しかも今や英本國攻略により、イギリスの植民地分離は、更に新しき世界長期戰に發展せんとする。

まさに新興ドイツは、我が日本の國體を研究し、日本精神を體得して、荒廢せんとする舊歐洲に、新しき世界を建設せんとする。

かくてドイツを知ることは、日本を知ることであり、また日本を知ることは、ドイツを把握することである。

本叢書は、この日本―ドイツの緊密なる世界史的關係を認識し、再强化するためにナチス・ドイツの本質を闡明せんとし、併せて、我が日本が何を爲すべきかの焦眉の問題に對する、明確なる解答を與へんとするものである。

序

ポーランド戰爭は、今次第二次歐洲大戰の直接の原因となつたものであり、且つナチス軍隊がその實力を世界に示した最初のものである。特に所謂電擊作戰の文字は實にこの戰爭から生れたものであると云ふことが出來る。實際この戰爭は僅かに三週間をもつてその結末を見たのであつて、苟も相當なる大國と看做されて居つた一近代國家が、斯くの如き短時日をもつて滅亡の悲運に直面せざるを得なかつたと云ふことは、實に有史以來未曾有の出來事である。從つてこの原因を探究し、その因つて來る處を究めることは、吾々日本人にとつても極めて重大なことであると思ふ。私は丁度この戰爭の始まる時、ポーランドの首都ワルソー

に駐在して居つて、具にその戰爭狀態の實際を體驗したので、聊これに關して記述し、各位の御參考に供したいと思ふ。尙引續き起つたところのソ芬戰爭にも參加し、彼の小數國民のフィンランドが如何に勇敢に抵抗したか、その目擊せるところに就て若干記述をなし、もつて甚だ面白い對象をなすところのこの二つの戰爭、即ち一は大國が短時日に崩壞し、一は小國が勇敢に抵抗を續け得たことに關し、若干比較研究して見るのも興味深いものではあるまいか。尙これ等に關する事項には今尙相當祕密に屬するもの多く、又國際關係上考慮しなければならない點もあるので、部分的には若干割愛しなければならないものも又止むを得ぬところであらう。

目次

目次

實戰場裡のナチス

1 戰前の情況

一、ポーランドの外交政策と獨波關係

ポーランドは第一次歐洲大戰後ベルサイユ條約によつて興つた新興國である。興國の親と云はれて居る有名なピルシュスキー元帥は、ポーランドが將來その獨立を保つて行くには是非ドイツと手を握つて行く必要を痛感し、終始親獨政策を強行して來たのである。ピルシュスキー元帥の死後、その衣鉢を受け繼いだスミグリー元帥も、又彼等と共に相援けてポーランドの國政を牛耳つて居たところのベック外相も、共に當初は依然親獨政策を採り續けて來たのである。然るに近年ポーランドの國力が漸次增大し、所謂大國たるの自負心の生じ來る

に及び、ともすればドイツ依存の外交を捨てゝ、所謂自主獨立外交に移らんとする傾向が見え始めた。然し乍ら、ドイツが所謂ズデーテン問題によりチェッコの一部を併合せる時までは、未だ親獨政策を堅持して居つたのである。即ちポーランドもこれに便乘してテシェン地方の一部をチェッコから割譲せしめたのである。然るに一九三九年チェッコの併合事件が起るに及び、俄然親獨政策はこれを放棄せざるを得なくなつたのである。即ちポーランドはドイツの政策が、一部を讓れば全部を要求し、その行くところ止まるなきを恐るゝに至つたのである。故にダンチヒ問題の如きは單なる一小部分の問題ではあるが、これをドイツに讓る時はコリドールの問題となり、更に進んで舊屬領返還問題となり、遂にはポーランドの獨立を脅すに至るものであると考へるに至つたのである。

尙又當時ドイツはソ聯邦に對して絕對的反對の立場を堅持して居た爲、親獨政策を實行せる時は獨ソの衝突に當りポーランドはドイツの前衞としてソ聯に抗せざるを得なくなり、その戰場となる恐れが多分にあるのでこれを忌避せんとする傾向が現れて來たのである。これが爲。一九三九年の春以來逐次親獨政策を離れて、親ソにあらず親獨にあらず卽ち中立政策

が爲。一九三九年の春以來逐次親獨政策を離れて、親ソにあらず親獨にあらず卽ち中立政策を保持するに至つた。なほこの間フランスとは從來の友交關係を保つて來たのであるが、フランスのチェッコ併合問題等におけるその實力の恃むに足らざるを知り、逐次親佛政策を捨て親英政策に移つて行つたのである。この情態がずつと戰爭直前まで續き、その間或は借款問題或は親善使節の交換等度々行はれて、遂には軍事同盟をも結ぶに至つたのである。

斯くして一九三九年の八月、ドイツが親ソ政策を發表し、これとの不可侵條約を公表し、これにより戰はずしてポーランドを壓伏せんとした時に當つても、ポーランドは英國の援助を恃みとし、毅然としてこれに抵抗するに至つたのである。

以上の如くポーランド建國以來堅持されて來た親獨政策が、スミグリー元帥及びベック外相の時期において放擲されたそのことが、この戰爭を惹起した重大な役割を演じて居るものであると云ふことが出來るのである。

二、ポーランドの國內事情

（一）國民性に就いて

獨波戰爭が起るや、ポーランドが相當の大國でありながら脆くも僅か一箇月足らずで潰滅したに反し、彼のフィンランドはあの小國であり乍ら數箇月に亘つてソヴィエトを相手として勇敢に戰つた。これ等の實情を見聞して、その中で一番深く私の心を打つたことは、その國の國民性といふか、國民の教養といふか、私はこれを民度といふ言葉で表現してゐるが、この民度が實に痛切に感じられたのである。御存知の如く、ドイツの民度が非常に高いことは世界で定評のあるところである。實際ドイツに行つて彼等と交際してみても、遺憾ながら確に未だ日本の一般の民度に比べ、尙彼等が數度先んじてゐるといふ點を隨所に見受ける。今次の彼の國の大活躍の原因も實に玆にあると思ふ。

然らばこれに對抗したポーランドの國民はどういふ狀態であつたかと云へば、ドイツに比べて比較にならないほど民度が低いといふことが出來る。

殊にその國民性には數々の惡い因子があつて、甚だ缺陷の多い國民性であつたと云ふことが出來る。例へば、非常に利口であるが併し所謂小利口であつて本當の利口ではない。また非常に熱情的であるが、所謂線香花火式のうはついた熱情であつて、じつくりと大地を踏みしめて行くといふやうな力强さがない。また非常に自尊心が强く、それが自惚に迄行き、從つて他のものを批判してその長所を取入れるといふ襟度がない。他のものを直ぐにけなすといふ性質がある。一例を擧げるならば、今次の戰爭に於ても、ワルソーの死守に當り、その開城の前日までは、吾等は名譽のため戰つてゐるのであるから、ワルソーは最後の一人になるまで之を死守する、勝敗の如きは最早問題ではない。かう云つた大言壯語をするのであるが、いざドイツ軍が一晝夜に亙つて間斷なく猛爆擊、猛擊を續けると、脆くもその翌日は、數箇師團の兵力を有しながらドイツの軍門に降つてしまふ、かういふ實情である。これに比

べるとフィンランドといふ國は非常にがつちりした國で、彼の民度を私は彼國に行くまではよく知らなかつたのであるが、實際行つてみてその民度の非常に高いことを知つた。彼等は自ら高い教養のある國民であることを非常に誇としてゐる。彼の帝政ロシアの壓政下に長い歳月に亙つて仰へ付けられてゐたのであるが、それでも自己の矜持を失はず、吾々はスラブ民族よりも教養の高い立派な國民である。彼等に對し決して抑へられてゐるものではないといふ自尊心をはつきり持つてゐる。從つて彼等はロシア語を使はず依然としてフィンランド語を使つてゐる。また彼等は、その祖先は所謂フィン族で、モンゴールに源を發する東洋民族であるが、それを非常な誇としてゐて、その精神の中に烈々たる氣魄を持つてゐる。この「ソヴィエト、何するものぞ」「彼等より吾々の方が遙かに立派な國民である。」といふ信念が如實に現れて、人口は僅か五十分の一に足りない、戰ひの上から云へば喧嘩にならないやうな劣勢な國家でありながら、よく數箇月に亙つてあの勇戰奮闘を爲し得たのである。

以上の如く、各國民の民度に於て非常な差がある。この差が、今次の獨波、芬蘇の二つの

戰爭に於て極端から極端なる結果を現した重大な因子といふことが出來る。本當に敎養が高く、眞に理解ある國民が揃つてゐるといふことは、國家の政策を行ふ上に於て、爲政者にとつて非常にやり易く、また國家としても非常な强みであると思ふ。丁度私が彼の地にゐて、開戰前の狀況を見てゐると、例の八月末ドイツとソヴィエトの不可侵條約が晴天の霹靂の如く傳へられ、全世界を驚倒せしめたが、ドイツとしては、今日までの主張から百八十度の急轉回を行つたのである。若しこれが民度の低い國であつたならば、非常な影響が現れ、大混亂を惹起することであらうと思ふ。然るにドイツ國民のこれに對する態度を見てゐると、何等の動搖も、何等の影響もない。彼等は實によく、國家が何故にこの百八十度の大轉換をしてソヴィエトと握手しなければならなかつたかといふことを理解してゐるのである。從つてソヴィエトと手を握つたからといつて急に共產主義に共鳴するでもなく、共產運動が熾烈になるでもない。またこれはドイツ軍の占領地ワルソー等に於て、役人軍人等末梢の部分の者と交際してゐるとよくその間の狀況が分るのであるが、彼等の所謂SS、或はSA、或は軍

隊の將校或はゲシュタポといふ祕密警察隊、それ等の人達と話合つてみても、彼等はよくヒトラーの政策を理解してゐる。何故にかうしなければならないか、從つて次に來るべきものは如何なる事であらうか、といふことをよく理解し居つて著々とそれに對する準備を怠らずやつてゐるのである。これに反しポーランドに於ける狀態は如何なるものであつたらうか。この不可侵條約が出來た時はポーランドは大騷ぎであつた。ところがそれに引續いて英佛がポーランドと同盟を締結した。さうすると今迄悄氣返つてゐた國民は有頂天になつてお祭騷をする。また九月一日開戰となつてからも、ドイツ軍の攻擊が急で、かなり悄氣てゐたが、九月三日、英佛が宣戰したとなると、その日は一日中旗を立てゝ街々を練り歩き大變なお祭氣分であつた。ところが翌四日、ドイツ軍の大空襲があると、また悄氣返つてしまふ。即ち彼等は、獨ソ不可侵條約が如何なる價値のあるものであるか、また英佛と同盟を結び、彼等が宣戰布告をしてくれたことが、實際に價値のあることかどうかといふことを、理解し判斷することが出來なかつたのである。而して唯徒らに政府の笛に踊らされて線香花火的な氣勢

を擧げる。從つて一度蹉跌すると、根據のない彼等の氣勢は、一擧にして覆つてしまふのである。翻つてドイツを見るに、この不可侵條約の問題に關しても、この百八十度の轉換に對して、國民の中に何等動搖の氣配もないといふことは、私の衷心より羨望に堪へなかつたことである。私共は軍人として軍隊を指揮し、また色々と戰術を行つてゐるが、その中で單に敵を攻擊する、敵に向つて眞正面から攻擊をして行く、かういふ軍隊を作るのは比較的容易なことである。然るに戰場に於ては、或る方面に主力を集中して敵を攻擊する場合には、或る方面は極く少數の兵力で敵を支へ、或は退却戰鬪を交へながら敵を操縱しなければならぬ場合も生ずる。勿論攻擊が何よりも一番適切ではあるが、戰術、戰略の大きな觀點に立つと或る一方面に於ては戰略的の退却も亦已むを得ない場合が起つて來るのである。かうした場合、通常その方面の指揮官のみはよくその事情を知悉してゐるのである。卽ち軍の最高命令を受け、この軍は退却しなければならぬといふことをよく知つてゐるのである。併しそれが一兵卒までよく徹底して、退却しながら少しも士氣を沮喪させず、悠々たる態度で退却しな

がら、軍紀嚴正に指揮官の命令の下に一糸亂れざる退却の出來る軍隊があつたならば、これは非常に精銳なる軍隊といふことが出來る。攻擊すること以上にこの方が難しいのである。

ドイツの場合に於ても、この獨ソ提携は、見方に依つては一種の思想的な退却戰闘と云へると思ふ。これが出來る國民であれば、その國民は非常に敬服すべき國民であるといふことが出來る。他の國に於てかういふ場合に、果して國民が動搖せずにその難局に立つことが出來るかどうかといふことは、吾々が最大の關心を以て注視しなければならぬところである。

ポーランドの如きはたゞ笛を吹いて攻擊することは出來ても、退却戰闘の出來る程の國民の民度はもたなかつたのである。

（二）宣傳に就いて

以上述べた民度の差異がひいては爲政者の國民指導上に、如何なる手段を採らしめるかに

於て非常な差異を生ぜしめる。

その中で私の深く感じたのは、プロパガンダ卽ち宣傳といふことである。この宣傳が如何に國民に深く浸潤し、國家非常時に於て重大なる影響を持つものであるかといふことを、このポーランドに於ける宣傳の要領を見て非常に深く感じた。

御承知の如くポーランドは、西にドイツの强國を控へ東にソヴィエトといふ强大國を控へその間に介在して而も建國僅か二十年、未だ日淺い國家である。從つて國民の士氣を萎靡せしめず、この兩强大國の間に立つて敢然と獨立を維持し、國運を進展させるためには、飽迄國民の士氣を鼓舞する必要があつた。そのためポーランドは國民に對して非常な大宣傳を行つたのである。この宣傳は、國民の民度が高ければ、事態の眞實をそのまゝ國民に知らしても差支ないのであるが、國民の民度の低い場合に於ては、さうした眞實を傳へることは却つて誤解を招く虞があるので、國家の政策に對して、或る程度、誇大な虚構の宣傳をも行はなければならぬ結果が起る。ポーランドに於ける場合がこの適例であつて、兩强國間に挾まれ

てゐる國民の士氣を沮喪させぬため、ポーランドは强いぞ。ポーランドはこれ等兩强國に對し決して劣るものではない。といふ宣傳をかなり深刻に行つたのである。その結果は國民の民度が低いため、その眞意を理解することが出來ず、一般大衆は政府の云ふがまゝにポーランドは本當に强いのだ、ドイツ又恐るゝに足らず、などと思ひ込んでしまふに至つた。ポーランドの海軍の如きは、僅かに前大戰の當時ドイツから獲つた小さな巡洋艦一隻と、その他驅逐艦二三隻といふ海軍であるが、この海軍を以て我等の大艦隊と稱し、國民に宣傳したのである。さうして烏滸がましくも英國と海軍の比率協定を締結した。英國としてはポーランドと比率協定を結ぶなら一對一でも結構であらうと思はれる。たゞ彼は老猾な國であるから喜んでこの比率協定を結んだのである。さうするとポーランド政府は、得たり賢しと、國民に對し、我國は世界の海軍國たる英國と海軍の比率協定を結んだ。かういふ風に宣傳した。その結果、國民に對する反響としては、ドイツも比率協定を結んでゐる、我等も亦比率協定を結んだ、我が海軍も相當なものだ、かういふ風に思はせたのである。またドイツの國情を

宣傳するに、ドイツにはバターもない、コーヒーもない、靴もない、靴下もない、國民は皆

宣傳するに、ドイツにはバターもない、コーヒーもない、靴もない、靴下もない、國民は皆跣で歩いてゐるのだ。から宣傳した。ソヴィエトに就いては、これはもう共産主義國で國民生活の狀態などは問題にならない。之に反し我が國民は、頭はよい、生活もよい、優秀な國家である。から宣傳をすると、國民は本當にさうであると思ふ。ドイツが澤山戰車を造つて優勢な機械化部隊が出來たことを非常に恐れてゐたが、國民を恐れさせては不可ぬといふので、ドイツの如き貧乏國が四、五千も戰車を製造し得る譯がない。あれは鋼鐵製ではなく紙製である。だから槍で突けば刺し通せる戰車である。かういふ軍隊教育を行つたのである。吾々には實に馬鹿らしいのであるが、民度の低い國民はそれを眞に受け、兵隊の中にも、ドイツの戰車は眞實に紙製だと思つてゐたものが隨分澤山あつた。現に東プロシアの方面には開戰當時ポーランドの優勢なる大騎兵集團が侵入したのであるが、これに對しドイツ軍はその退路を遮斷し、空からは優勢な爆擊機、地上では裝甲車戰車で蹂躙したのである。さうして文字通りこれを殲滅してしまつた。私はドイツの將校に聽いたのであるが、ポーランドの

騎兵は御存じの如く槍を持つてゐて、これを馬上で自由に使ふ實に優秀な騎兵である。この騎兵が戰車に向つて襲擊して來て、槍で戰車を突いた。ところが突き通らずに俘虜になつてしまつた。後でドイツの將校が、何故戰車に向つて槍で突いたのであるか、餘りに無謀ではないかと訊いたところ、我々はドイツの戰車は紙製で、突けば通ると敎へられたから突いたのであるといふ返事である。かういふ笑ひ話のやうなことを云ふのである。このやうに宣傳といふものは、餘程愼重に考へて行はぬと、國民を誤る意外な結果を生ずるのである。

橫道に入るが、我國の宣傳といふものも、吾々が歐洲にゐて見てゐると、實に寒心に堪へぬものがある。日本の宣傳といふものは、如何なる關係、如何なる理由か、大體に於てアメリカ邊の金持の觀光客を誘致する宣傳、これで總てが盡きてゐる。從つてそれがアメリカの金持に對するならそれでよいが、ポーランド等に外務省その他から來る宣傳文その他に於ても全くその範圍を出でない。或る時大使館で外國の使臣等を招いて日本の宣傳映畫をやるといふので私も行つたのであるが、その映畫といふのが京人形の製作を示したものであつた。

家内手工業の一部分であつて、小さな部屋に胡床をかいて法被を着た職人が人形を作つてゐる。藝術的には非常によいものであらう。併しこれを見たエストニア、ラトビア、フィンランド、ルーマニア等あの邊の小さい國の使臣が、これが眞の日本の姿である、かう思ふのは無理ではない。從つてポーランド等に於ける日本の認識の程度といふものは全く零である。吾々も種々の關係からポーランドとの貿易などに關して聊か努力したこともあるが、この貿易といふことなどは、互に尊敬してゐれば非常に交渉がすら〳〵と運ぶ。併し相手の日本に對する認識がこの程度では、交渉は甚だ困難で、その衝に當つた人も隨分苦勞をしてゐた。實際ポーランドの相當な知識階級の人と吾々が話をしてみても、日本に電燈があるか、電車が走つてゐるか、などといふ質問は普通で、まさか今時そんな質問をすることはなからうと考へられるかも知れぬが、さう考へるのが吾々の認識不足といふものである。私が牛乳を飲むのを見た一ポーランドの婦人は、あなたは日本人でも牛乳を飲むのかと、奇妙な質問を發したことがあつた。宜しく宣傳といふものは、その國、その方向に依つて變化を與へ、觀光

客誘致を目的とする方面にはフジヤマ、藝者ガールもよいであらう。併し、二流三流の國に對し日本の威力を示さなければならぬ場合は、日本の大陸軍の威容を示したもの、大空軍の活躍とか、大重工業地帶の實景とか、世界を風靡してゐる日本の船舶界の狀況、かうした方面を示すことに依つて初めて本當の日本の宣傳が出來るものと思ふ。この點、ポーランドに對し非常に働きかけてゐたフランスの如きは至れり盡せりで、ワルソーにはフランス國營の映畫劇場がある。ナポレオンといふ劇場であるが、そこではフランス映畫のみ上映し、フランスの宣傳に努めてゐる。丁度八月頃、吾々も觀に行つたが、「フランスは軍備成れり」といふ陸海空軍の狀態を收錄した立派な宣傳映畫があつた。フランスの海軍が威風堂々と現れる場面になると二、三千噸の巡洋艦一二隻しかないポーランドの國民は、成程フランスは强い、フランスに賴らうといふ氣分が起る。私共からみれば、フランスの海軍などは問題にならぬ海軍であるが、彼等にとつてはさうではない。觀艦式といふものは海でやるものと吾々は思つてゐるが、ポーランドではワイクセル河で行ふのである。觀艦式を河でやる海軍しか

持たぬ國からみれば、フランスの海軍も非常な大海軍に見える。從つてフランスに頼るといふ觀念が國民全體に植ゑつけられ、從つて外交交渉もすら〳〵と運ばれる。然るに先に述べた如き程度の日本に對する認識では、實際に外交を行ふ上に實に苦勞される事と思ふ。試みに私はポーランドの中等學校の地理の教科書を見たのであるが、日本といふ欄には、僅に半頁を割き、日本とは本州、四國、九州、北海道、これらの島々から成つてゐる東にある島國であつて首府を東京とする。唯これだけであつた。斯くの如き狀態である。敢て掛値する必要は毫もないが、眞實の日本の力、日本の狀態を、本當の程度を各國に知らしめたならば、日本の立場といふものも餘程好轉すると思ふのである。

宣傳といふことは誠に大事なことである。特に民度の低い場合にあつては、政府が苦勞をして虛構の宣傳を行はねばならぬことになり、その結果、遂に國を誤らしめるといふことが實際にあるのである。決して疎かにすべきものではないと思ふのである。

（三）社會事情に就いて

次に當時に於けるポーランドの社會生活の實情に就いて述べてみようと思ふ。これは現在の日本にも多少關係があるので、主にドイツを中心として參考迄に述べてみることにする。

既に戰が始まつた關係上、ポーランドは無論統制經濟、總ての事が統制で非常に束縛された狀態であつた。ところで、ドイツに於ける統制が非常にうまく行つてゐることは周知の事實である。總てが切符制度で極めて圓滑に行はれ、國民各自に多少の不平はあつても眞に不平らしい不平はない。例へば食糧にしても、吾々は外交官のパスポートを持つてゐたが、之等外國使臣に對してさへも向ふへ行けば直ぐ切符をくれて、その切符の範圍内で飯を食はねばならぬのである。さうして一人一箇月の量といふものが決つてゐて、その量が極めて計算的に割出されてゐる。一番カロリーを必要とする人間には一番餘計パンでも肉でも支給するし徒衣徒食してゐて餘りカロリーを必要としない人間には極く僅かの食料しか與へない。而も

徒衣徒食してゐて餘りカロリーを必要としない人間には極く僅かの食料しか與へたい。而もそれは切符がなかつたならば、如何に現金を持つて行つても品物を賣らないのであるから、結局一番カロリーを必要とする人間が假令貧乏人であつても一番美食をし、さうでない人間は如何に富裕であつても餘計に食へないといふ狀態になつてゐる。從つて彼等の中には不平が起らない。これに比べて日本に於ては、統制々々と云ひながら、少しでも金のある者は何處へ行つても切符なしに自由に食物を選擇し、鱈腹食べることが出來るのであるから、その程度は比較にならないものである。

また闇取引の問題であるが、ドイツに於ては無論絕無と云つてよいと思ふ。これも前に述べた國民の民度といふことに關係するのであるが、ドイツでは一つの法令が發布されると即日施行されるのである。國民がその法令の精神をよく汲み取つて、如何にしてその法令の精神を生かすかといふことに意を注いでゐるやうに思はれた。從つてその裏を搔いて拔穴を探し、利益を得ようなどゝいふ淺間しい心のものはないのである。これがポーランドに來ると

賓によく法網を潜つて憚らない。ドイツ軍がワルソーを占領して、占領地行政を施行するに當つて、ドイツに於けると同様な氣持と精神を以て一つの法令を發布し、翌日直に施行といふ調子でやつたところ、頗る手を焼いた。物價が鰻上りに騰貴する、殊に食糧品の騰貴が甚しく、貧しい民衆は生活が出來なくなつた。これでは不可んといふので、現在東京で實行してゐるやうに食糧品に公定價格を決めたのである。ところが翌日になると商店といふ商店は一齊に閉店して物を賣らない。一週間ばかり經つたが、これではワルソー市民が生活を續けて行くことが出來ないと云ふので、一時禁令を解いて元通りの値段で賣つてもよいといふことになると、翌日は商店が一齊に開店する。こんなわけで、公定價格では不可んといふことになつたのである。私が日本に歸る頃には、ワルソーもそろ／＼切符制度を强制實行しようとする氣運であつた。

またドイツに於ける闇取引に就ては、私がドイツに駐在中、或る大きな靴屋が、何かの關係で六、七足の極く僅かな靴を闇取引で融通した。それが處斷されることになると三百萬マークの罰金である。その靴屋の全財産が約一千萬マークといふので、三百萬マークを課して

ークの罰金である。その靴屋の全財産が約一千萬マークといふので、三百萬マークを課しても徴收が出來るといふのでこの判決となつたわけである。ドイツの刑罰法令を見ると、日本の罰則の如く五千圓以下の罰金とはせず、二千圓以上の罰金といふ風に規定してゐる。從つてその性質によつて、またその人間に依つて罰金の額を決定することが出來る。惡辣な人間に對しては益〻高額の罰金を課するのである。日本に於ける如く、五千圓以下の罰金であるから、儲が五千圓以上あれば結構だなどゝいふ者が絶對に出ないのである。

またあの一年間に亙る燈火管制、これは日本と違つて始終空襲の非常管制であるから、いつも眞暗闇である。この暗黑の中で夜中でも女子供が獨り歩きが出來るほどに秩序が保たれてゐる。その原因は、一寸したこそ泥でも極刑に處せられるからである。國家の行ふ燈火管制を惡用して行ふが如きは最も惡辣な犯罪であるといふ意味で、搔つ拂ひでも即日死刑に處せられるのである。彼に云はしめれば、かういふ非國民的な犯罪を犯す者は、たとひその犯行は輕少なものであつても、性質上許すべからざるものであり、かゝる人間を生かして置い

ても將來何の役にも立たぬ、却つて國家のためには許すべからざる害毒を流すものである、といふわけで死刑にしてしまふのである。これほど徹底してゐるので、暗黑の中でも嚴然と秩序が維持されてゐるのである。

三、戰爭勃發の直接の原因

獨波戰爭勃發の直接の原因は何と云つてもダンチヒ問題である。抑〻ダンチヒは實際吾々が行つて見ても直ぐ分ることであるが、純然たるドイツの町であつて、住民の殆んど全部と云つても良い程のものが悉くドイツ人である。故にポーランドとしてはダンチヒに對しては執着したことなく、將來當然これを放棄しなければならないものとして、これに代ふるに有名なグデニヤ港を建設したのである。而して戰前既にポーランド貿易の大部分はこのグデニ

名なグデニヤ港を建設したのである。而して戰前既にポーランド貿易の大部分はこのグデニヤの港によつて爲されてゐたのであつて、實際上のダンチヒの價値なるものは、ポーランドに取つて極めて僅少なるものとなつて居つたのである。

然るにこのダンチヒ返還要求を告げられた場合、何故ポーランドがこれを拒絕したかと云ふと、一つは前に述べたやうにドイツの要求は單にダンチヒ問題に止まらずして必ずチエッコの例に見るが如く、更に進んでコリドール返還問題となり、續いて舊獨領の返還問題に迄發展するであらうことを怖れたのと、他の一つは近時頓に大國となつて來たところのポーランドの名譽の爲にも應ずることが出來ないと云ふことであつたのである。

一九三九年の春ドイツから提出された要求は極めて微溫的なものであつて、これを受け容れたからと云つて敢てポーランドの名譽に關する程のものではなかつたのである。然るにこれを拒絕するに及び、獨波關係は急速に惡化の一路を辿るに至つたのである。かくて八月となるやドイツは俄然ソヴィエトと親交關係を結ぶに至り、ポーランドの立場は極めて困難なものとなつて來たのである。然る時にポーランド又屈することなく英波同盟をもつてこれに

戰前の情況

對抗したのである。斯かる狀態となるに及んでは、ドイツとしても最早外交政策による自己の目的達成の不可能を悟り、ポーランド又ドイツとの一戰を覺悟せざるを得ない立場となり遂に九月一日兩軍衝突を見るに至つたのである。尙吾々第三者から見れば如何に近年ポーランドに實力が出來たとは云へ、何と云つても建國未だ二十年を過ぎぬ新興國家であり、國力から云つても、人口から云つても、軍備から云つても、到底ドイツの敵ではあり得ないと思はれ、又如何に英國と軍事同盟を締結したとは云へ、英國の平常に於ける軍備の狀態から見ても急速なる援助の期待出來ざることは明白で、當然ポーランドは單獨で少くとも數ケ月或はそれ以上の歲月をドイツと戰はなければならないことの明かなる事情にありながら、何故にかゝる無謀なる軍を敢てするに至つたか、寧ろ不思議に思はれるのである。その理由は一に前述せる如きポーランドの國民性、その大國振り、實力なき自負心に因つて來つたものでポーランド開戰の原因を知る爲には實に以上の事情を知らなければ全くその判斷に苦しむのである。要するに實力なきものが、その自惚の心をもち慢心するに至る時は實に國家を誤ま

である。要するに實力なきものが、その自惚の心をもち慢心するに至る時は實に國家を誤まるが如き重大なる結果を招來するものであつて、その實例は幾多歷史上に見ることが出來るのである。この點わが日本國民としても深く反省すべきところであらうと思ふ。

四、戰爭準備

ポーランドの戰爭準備に關する資料は今尚嚴祕に祕せられて居つて、その眞相を知ることは極めて困難であるが、大體次の如く觀察することが出來る。ポーランドの內政はスミグリー元帥を首班とするところの軍監部により牛耳られて居り、國民も又軍に信賴し、反政府系統派と雖ども、軍備充實に對しては公然反對するものゝない狀態であつたのである。然しながら建國日なほ淺く財政又豐かならざるポーランドが、如何に努力したとは云へその軍備の程度は推して知るべきであらう。從つて平時三十箇師團の軍隊を有して居つたのではあるが

その內容並に後方補給の整備に至つては尙且つ不充分なるものがあつたことゝ思はれるのである。又鐵道の如きもその收入の大部分は軍事費に當てられて居り、極端に輕視された運輸業務においてはその輪轉材料の行使の如きも意に任せず、一朝有事の際の軍用としての價値に於て甚だ寒心に堪へないものがあつたのである。又ポーランド軍備の特長は、その歷史から見て對ソ方面、卽ち東正面に重きを置いて來たことは事實であつて、對獨方面卽ち西の方面にこれが向けられたのは、實に一九三九年の春卽ち獨波關係が惡化して來てから應急的に手を着けたに過ぎないと云つても過言ではないのである。この點は獨波戰爭を觀察するに當り大いにポーランドに同情をしてやらなければならぬ點であらうと思ふ。又ポーランド政府は軍需品自給の必要を感じて、ワルソー附近その他に重工業地帶を建設し開戰前既に一部その操業を開始して居たのであるが、未だその實績の充分でないのは勿論であつて、國民全般も、特に政府主腦部のこの緊迫せる時局に關する態度は、何と云つても認識不充分の譏を免れないであらう。一九三八年政府は產業十五ケ年計畫を立案しその緩慢なる態度を各方面か

ら非難されたのであるが、これ等も今次敗因の重大なる一つと云ひ得るであらう。この點は吾が日本としても笑へないことで、現在に於ける如き軍備の充實、並に軍需品の自給、重工業の進行等に關して、今二三年も早く目覺めてこれに着手して居つたなれば、恐らく今日の如き困難な狀態に立ち到らなかつたであらうし、又考へやうによつては日支事變すらも起きないで濟んだかも知れない。この點決してポーランドを笑へないのであつて吾々自らも深く考へなければならないことゝ思ふ。西部國境方面に於けるポーランドの築城狀態の如きは以上の理由によつても推察出來るやうに實に粗末なものであつて、かの精鋭にして近代的裝備を有するドイツ軍隊の進擊の前には全く何等の用も爲さなかつたのである。東プロシヤ方面に造られたトーチカ式地帶の如きも全く應急的なものに過ぎず、戰後吾々がその戰場に行つて見るに、攻者であるドイツ軍の方の國境地帶に於ける築城は極めて近代的な立派なものが連綿と連なつて居るに反し、防者であるポーランド軍、即ちその築城に據つて戰はなければならないポーランド側の築城が、遙かに劣つて居つたと云ふことは甚だ面白い對象である。

築城と云ふものは決して單なる防禦的なるものではないのであつて、攻める方のものにとつても實に重要な役割を演ずるものなのである。ドイツの對フランス攻勢に當り彼の有名なジーグフリード線が演じた役割を考へる時、極めて明瞭にその意味を解することが出來るであらう。

尙軍備擴張案に就いて見ても一九三六年度には步兵一軍團及び多數の裝甲部隊等の創設を企圖したのであるが、その實情に關しては疑問である。又開戰直前機械化部隊の新編成を完了し、なほ東部國境方面に於ける部隊を逐次增强しつゝあつたのである。これ等はその完成を見ざる中に開戰となつた次第である。何れにせよポーランドが緊迫した情況の下にあるにも拘らず、政府國民共に先見の明がなく、その實施が極めて緩慢であつたのに反し、ドイツはヒトラー總統の明斷により着々新軍備を完成し、殊に開戰直前にあつては例のタンネンベルヒ附近に於ける大演習に藉口して、對ポーランド戰に必要なる全軍隊の動員を完了し、何時にてもこれに應じ得る準備を完成して居つた事實に較べ、ポーランドの準備は甚だ不充分

であつたと云はなければならない。即ち强者が充分なる準備を整へ、これに對する弱者が不充分なる準備をもつて立向つた、玆に本戰鬪の結末は旣に明瞭に定まつて居つたと云ふことが出來るのである。

II 戦争の經過

一、獨波兩軍の作戰計畫

本問題に就ては戰爭經過を一見する時大體想像するに難くないので、ナチス獨逸の軍首腦部の卓越せる作戰指導には實に敬服に堪へないのである。抑々決勝を企圖する方面に兵力を徹底的に集めると云ふことは、戰術上千古不磨の原則である。ドイツ軍は實に實戰に於て文字通りこの原則を實行したのである。即ちドイツ軍はその主要兵力の殆んど大部を、東プロシヤ方面から南下してワルソーに向ふ軍と、シレジヤ及びスロバキヤ方面から北進してワルソーに向ふ軍とに分け、所謂釘拔戰術的に南北からワルソーに向つて殺到し、その包圍下にポーランド軍主力を壞滅し去つたのである。この際ポーゼン方面の國境附近には殆んど一兵をも配置せず、ポーランド軍主力に對し自由にその侵入に任せるが如き、實に大膽不敵と云

はうか卓拔と云はうか、徹底した作戰指導を行つたのである。これに對しポーランド軍は殆んど國境の全正面に亙り兵力を分散配置し、その重點と認むべきものはなかつたやうに思はれる。この作戰計畫の良否が獨軍の精鋭さと相俟つて、戰爭の經過を益々ポーランド軍にとり困難なる情勢を形成して行つたのである。開戰數日にして獨軍の先鋒がワルソー附近に達した時機においても、尙且つポーランド軍の主力はポーゼン方面から一部獨領に向ひ侵入攻勢作戰を採つて居たやうな情勢であつて、一時はその戰勝を誇大に報道せられ、ポーランド國民をして歡喜せしめたものである。これに對しドイツは這入つて來るなら這入つて來いと云ふ毅然たる態度で、ポーゼン方面には何ら考慮を拂はず、一意その强力なる作戰計畫の遂行に邁進したことは實に感服に値するものと思ふ。而してそれが爲には國民の軍に對する全幅の信頼と理解とがあり、その結束に充分なるものがない場合は、斯樣な放膽なる作戰の指導と云ふことは爲し得ないのである。第一次歐洲大戰に於てドイツ軍はロシヤ軍に對して一時守勢をとり、その主力を西方フランス方面に指向し、怒濤の如くパリを目指して侵入して

行つたのである。この作戰計畫は有名なシュリーフェン元帥の發案になるもので、當時の參謀總長モルトケ將軍も、多少の修正はしたが大體に於てこれを踏襲したのである。然るにロシヤ軍の東プロシヤ侵入が豫期に反して早く、同地方がその鐵蹄下に蹂躙せられんとするに到るや、國民は囂々として軍部の處置を非難し、吾がドイツ發祥の地たる東プロシヤを敵の手に委ねることはドイツ國民として忍ぶべからざるところであるとなし、軍部及び政府を非難する運動が澎湃として起つたのである。當時の參謀總長モトルケ將軍は遂にこの國民の非難に抗するを得ず、有力なる部隊を割いて東プロシヤに送るに至つた。その結果、有名なるタンネンベルヒの大殲滅戰が行はれ、東プロシヤの危機は完全に救はれたのであるが、その爲マルヌの開戰に於て兵力の不足から遂に一敗地に塗れるに至り、ひいては勝つべかりし彼の第一次歐洲大戰に於て最後の敗者とならざるを得なかつたのである。この點は吾々にとつても實に大なる教訓を與へるものであつて、古來統帥と云ふものに部外者の何者をも干渉を許さぬと云ふことは、實にこれ等の歴史上の事實が明にそれを證明して居るのである。

然るに今次大戰に於ては、ドイツはナチスに因つてその國内の統制を確立し、國民又これに對して全幅の信頼をなし、その結束愈々鞏固なりし爲、たとひポーランド軍がポーゼン方面から直路ベルリンに迫ることありとするも、この一糸紊れざるナチス統制下のドイツ國民は何等騷ぎ立てることなく、再び前大戰の轍を踏む醜體は見られなかつたであらう。斯の樣な狀態にあつてこそ軍部としてもこの放膽なる作戰を、安心して實行することが出來たのである。この點省みて吾が國民はどうであらうか。果して敵の一部、或は主力が吾が國土の重要なる方面、特に、その首都の附近に迄攻め入らんとするに當り、このドイツ國民の如く悠然として統帥に信頼し政府に信頼して、冷靜にその身を持して居ることが出來るであらうか。一寸した戰況の蹉跌にも囂々として湧き立つのではあるまいか。何等深く考ふるところもなく、又確實なる證據なきにも拘らず、今迄幾多のパニックを起さんとする傾向をもつて居る吾が國民としては、實に反省すべきところであらうと思ふのである。

二、戰爭經過の概要

作戰に關しては既に公刊された戰史の本もあることであるから、此處にはこれが記述を省略することゝする。尙その概要はワルソー籠城の日誌に於て後述するが、それ等を見ればワルソーから觀た作戰經過の全貌が理解出來るのである。

要する文字通り電擊的作戰經過であつて、大體の戰爭の結末は開戰後二週間にして既に定まり、九月十七日早朝ソヴィエト軍が國境を越えてポーランド領に侵入するに及び、遂にその終末を見るに至つたのである。

以下各種の本作戰における各種事象を把へてこゝに檢討し、その折にふれて作戰の推移の狀態の若干を記述することゝする。

（一）空軍の活躍に就いて

御承知の如く今次の歐洲大戰爭は、ドイツ軍のポーランド進擊にその端を發したものである。この時のドイツ空軍の活躍といふものは實に目覺ましいものであつた。電擊作戰といふ言葉は、初めてこの戰爭に於て生れたのであるが、その電擊作戰を成功せしめた重大なる要素は、實にこの空軍が演じてゐるといふことが出來る。

當時ドイツ空軍の持つてゐた飛行機は、大體第一線機が七千か七千五百機位と推定されるのであるが、ポーランド戰線に使用された飛行機は、大體その三分の一乃至二分の一位の二千五六百機とも云ひ、三千機とも云つてゐる。卽ちドイツにとつては、その一部の兵力を使用したに過ぎないのであるが、それでも、その效果は極めて重大なるものであつた。

用したに過ぎないのであるが、それでも、その效果は極めて重大なるものであつた。

九月一日愈〻開戰といふことになつたのであるが、電擊的のドイツの作戰は隨所に功を奏し、九月八日の夕方には既にその先鋒はワルソー郊外に達し、私共は大使館にゐて、既にドイツ軍の砲聲を耳にしたのである。かゝる迅速な成果を收めたその最大の原因は、實に空軍の活躍に俟つものが多かつたのである。

ドイツ空軍は九月一日の開戰と同時に、その朝まだき全基地を出發し、その有力なる兵力を以て、ポーランド空軍の根據地を數次に亙つて制壓し、爆擊したのである。この猛烈な爆擊に依り、未だ準備を完了してゐなかつたポーランド空軍は全く混亂し、少くともその七八十パーセントは、既にこの第一擊に依つて潰滅し去つたと云はれてゐる。爾後この第一擊に壓倒されたポーランド空軍は、遂に再び立ち上つてドイツ空軍に刃向ふ勇氣を失ひ、たゞ逃げ廻つてゐるだけであつて、制空權といふものは完全にドイツ空軍の掌中に握られたのであつた。從つて九月二日以後のドイツ空軍は、全力を擧げて地上の作戰に協力し得たのである。

その協力の方法がまた甚だ適切であり猛烈を極めたものであつて、最初に先づポーランドのあらゆる戰略的軍事施設に向つてその全力を集中した。即ち飛行機工場とか軍需工場とか、或は鐵道交通の要點であるとか、さういつたものに爆撃を集中したのである。

これが九月二日、三日、四日と三日間ばかり續けられたのであるが、その結果ポーランド全土に於ける交通機關のすべてが、完全に停止してしまひ、九月四日にはワルソーを出發した避難民列車は、悉くワルソー郊外に於て前進不可能となり、ワルソーに引返して來たのである。斯くの如く主要なる各交通機關、道路といふものは、悉くドイツ空軍の餌食となつて破壞されたため、ポーランド軍の統帥部といふものが、如何に適切なる妙案を持つてゐたにしても、何等施す術がなかつたわけである。當時のポーランドは、前述の如く、未だ準備も整はず、統帥部を初め國民一般の戰爭に對する氣構に於て缺くるところ甚だ多かつたためあらゆる準備が不十分であつた。僅か三十箇師團の陸軍しか持つてゐないポーランドが、その豫備師團等の動員さへも終らなかつたといふ狀態であつた。從つて九月一日開戰となるや引

續き動員輸送を行つたのではあるが、それすらも開戰直後のドイツ空軍による交通機關の潰滅のため、全部行ふことが出來ず戰爭が終つてしまつたといふ狀態に立ち至つたのである。

軍隊の動員といふことは、部隊を戰時の體制に改めることであり、次にこの集つた部隊を或る作戰地に運ぶといふことであるが、それがためには先づ第一に交通機關が必要である。わづかな兵力しか持つてゐないポーランド軍が、その兵力の全部を動員することすらも出來ないで優勢なドイツ軍と戰ふことになつた。かゝる結果を見るに至つたのもその由つて來るところドイツ空軍の偉力である。

またワルソーからポーゼンに到る間には、立派な自動車道路が續いてゐるのであるが、この道路も悉く役に立たなくなつた。何故かといふと、當然ポーランド軍はポーゼンの戰場附近に集中してゐたので、その後方の道路には輜重とか、砲兵とか、それらの自動車部隊といふやうなものが種々頻繁に往來してゐる。勿論軍の後方の作戰路といふものは、車輛や人馬等で充滿してゐるのが常であるが、それに向つてドイツ爆撃隊が優勢な空軍を以て數軒に互

つて猛烈な爆撃を加へたのである。その爆撃を受けた後の狀況といふものは實に慘めなもので、路上には自動車が燒かれてゐる、馬が斃れてゐる、車輛が顚覆してゐる、それが數粁に亘つて放置されてゐるので、道路は全く塞がれて通行することが出來ない。かういふ狀態で僅か三四日の間に全交通機關が殆ど杜絕してしまつたのである。從つてワルソーから兵器、彈藥を前方に送らうにも、食糧を送らうにも、增援隊を送らうにも全く手のつけやうがなくなつてしまつた。劣勢な兵力を以て優勢なドイツ軍に立ち向ふポーランド軍としては、速急且つ敏速に兵力の輸送を行ひ或場合は此方に持つて來、また彼方に持つて行くといふふうに、軍隊用語で云へば、內線作戰といふものを行はなければならぬ。ところが肝腎な時に最も重要な交通機關が杜絕してしまつたのである。故に、ドイツの優勢な機械化兵團が、これに呼應して各方面から突込んだ軍と相俟つて、南の方の一兵團卽ち南の方の主力、北の方の東プロシヤに向つた一部隊といふふうに、ポーランド軍は各個に大殲滅をされる結果となつたのである。而してこのドイツ軍の爆擊の狀態といふものは實に見事なもので（私共は專門家と

して觀てゐたのであるが、その勇敢なること決定的なること、全く感心に堪へぬものがある。
前述した如く、九月二日から四日に亙る三日間、ドイツは、各交通の要衝を爆撃したのであるが、その模樣を少し述べてみたいと思ふ。
御存知の如くワルソーの街の中には、丁度東京の隅田川のやうな河が流れてゐる。この河に三本ばかりの重要な橋梁が架つてゐる。その橋梁をドイツ空軍は狙つて爆撃に來た。飛行機は全部有名な急降下爆撃機で、目標とする橋梁の眞上に來てさつと機首を下げ急降下し、爆彈を投下すると同時に引上げて去るといふ爆擊法を採つたのである。
此の爆擊法は、命中率は極めてよいのであるが、豫め敵の準備してゐる火力の中に身を挺して突込むのであるから、甚だ危險な率の多いものといふことが出來る。この危險をドイツ空軍は何等意に介せず實行したのである。大體千四五百米位の高度を取つて來て、それから爆擊行程に入り七八百米位降下した所で投彈し横に逃避するのである。其の間觀てゐると、地上には機關銃、機關砲が無數に竝んでゐて、雨霰と火力を集中し、曳光彈は大きな火の束

となつて飛行機の方へ無數に集中する。その中を單機の機隊になつて、第一番機、續いて二番機、三番機といふやうに數回繰返して目標を爆撃する有樣は實に壯觀である。而もその爆撃には狂ひがなく眞正面の目標に向つて來るので、その近傍にゐる私共は何等の危險を感ずることなく觀てゐることが出來る。丁度大使館は河の重要な地點から五百米ばかり離れた所にあるが、大使館の屋根に上つて眺めてゐると、丁度屋根の上の私共の眞上の上空に達すると急降下行程に入り爆撃するのであるから、安心して觀てゐられるやうな狀態であつた。

又ワルソーの郊外にあるポーランド一二と云はれる有名な飛行場に來た爆撃隊の如きは、もう全く決死の覺悟で、僅か六機の爆撃機であつたが飛行場は一瞬にして全く燃え上つてしまつたのである。私は武官室の窓から見てゐたのであるが、飛行場の上に來てさつと下つて來て、殆ど見えなくなつて、或は落ちたのではあるまいかと思はれるほど突込んで爆撃するのである。從つて完全に全彈が命中する。併し地上からもしこたま射たれ、この決死的な爆撃機の中二機は撃墜され殘りの四機も恐らく相當の損害を受けたであらうから、果して基地

擊機の中二機は擊墜され殘りの四機も恐らく相當の損害を受けたであらうから、果して基地に歸れたかどうかこれは疑問である。この「飛行場を擊滅せよ」と云ふ任務に對し、飽く迄忠實に、飽く迄勇敢に戰死を期して突込んで來る所謂ドイツ魂といふものに、私は實に心を打たれたのである。

この空軍の活躍といふものは、ポーランド戰線ばかりではない。その後のノルウェー作戰にも、また西方フランス方面に於ける攻擊に於いても隨所に發揮されてゐる。オランダに侵入した空軍の中で有名になつたのは、例の空輪挺身隊である。當時ドイツで完全に編成されたのは、確かに一箇師團あつた。その一箇師團の編成は、所謂落下傘降下部隊といふものが一箇聯隊、その外に空輪挺身隊といふものが二箇聯隊位ある。これが一箇師團に纒められ、師團長に指揮されてゐる。その空輪挺身隊がオランダを襲擊した時は、御承知の如く最初に落下傘部隊が行つて空中から飛び下り、それが必要な飛行場を占領する。そこに食糧が空中輸送され、また部隊が輸送される。どん〳〵着陸して、大砲でもタンクでも機關銃でも殆ど完全に輸送されて、そこで偉力を發揮することになる。その空輪挺身隊の攻擊の狀態なども

實に壯烈極まるもので、現にこの師團長の如きは、將兵に率先して飛び下り、自らも重傷を負つたのであるが、師團長が率先して空中から飛び下りて敵を攻撃するといふやうなことは、未だ他國にその例を見ないことである。

又ベルギーの國境にはエベンエメルといふ要塞がある。これを突破しなければフランスに侵入することが出來ない。丁度第一次の歐洲大戰に於けるリエージュ要塞といふやうな關係の位置であつた。ドイツ軍がこの要塞に向つてどうしたかといふと、地上からも猛烈に攻撃すると同時に、この要塞の眞上に落下傘降下部隊を下した。そしてこの決死的な飛下りに依つて、僅か百名足らずの落下傘の兵員であつたが、遂に堡壘を拔いてしまつたのである。一體落下傘の降下部隊といふのは一般の原則として、大體敵の居らぬ所に降下し、そこから行動を起して目標を攻略するのが建前である。何故なれば、水母のやうに空中からふは〳〵降下して來るのであるから、地上で前から十分に準備してゐるならば、下りて來る人間を一人一人狙ひ射ちに射殺することが出來る。從つて敵が十分に準備してゐる場所、殊に要塞といふ所に落下傘部隊を下すといふことは、一般の戰術から云へば、非常に誤りであるといふこ

ふ所に落下傘部隊を下すといふことは、一般の戰術から云へば、非常に誤りであるといふことが出來る。これを敢てドイツ軍は實行し、而も確實に成果を收めたのである。最後まで任務の要求するところ眞に死をも恐れず、敢然と起ち向ふところのドイツ空軍魂がこゝにも窺はれるのである。

またフランス軍が難攻不落を誇つた例のマヂノ要塞をセダン附近に於て一擧にして突破し去つたのであるが、このセダン附近の攻撃に當つても空軍は最も重要な役割を演じてゐる。卽ちこの方面の要塞線突破に向つたドイツ軍は、大體一箇師團に二粁乃至三粁の正面を擔當させ、一路突破に邁進したのであるが、これに對しドイツ空軍は大體一箇師團の正面に五百機內外の爆撃機を同時に協力させた。卽ち二、三粁の正面に五百機であるから、あの突破正面が二、三十粁あるとすれば、優に五千機の飛行機を協力させてゐる。この飛行機の協力の數といふものは、實にちよつと想像の出來ない位猛烈なものであつて、私がワルソーにゐる當時、ドイツの重爆撃隊が攻撃に來た機數を考へてみると、同時に來たのは百二、三十機來

たのが一番多いものであつたが、それだけの飛行機でも同時に爆撃に來たのを窓から見てゐると、目が眩むやうな感がした。大きな翼を擴げた爆撃機が空を蔽ふといふ感じがしたのである。それが同時に五百機も來た所は、實際筆舌に盡せない位の壯烈なものであつた。而もそれが各〻百瓩二百瓩乃至二百五十瓩といふ爆彈を落すのであるから、全く百雷の落下も啻ならぬ狀況であつたと思はれる。實際話に聽いたのであるが、當時その堡壘火線の中には、フランス兵が裝備した機關銃や火砲を構へて待つてゐたのであるが、この大爆撃を受け、その爆發偉力に依つて一時精神喪失狀態に陷つたのである。そこへ引續いてドイツの機械化部隊の先頭が來たので、流石の難攻不落のマチノ線も一擧に突破されたのである。

斯くの如くドイツ空軍は、到る處に猛威を逞うしたのであつて、「海を制する者は世界を制す」といつた海の時代から、既に「空を制するものは世界を制す」といふ時代に移つたことが明瞭に現はれるのである。

去年の二月頃、私はワルソーを出て一時フィンランドに行つた。ソ芬戰爭の最中であつた

去年の二月頃、私はワルソーを出て一時フィンランドに行つた。ソ芬戰爭の最中であつたが、フィンランド側に從軍して、この戰爭の狀態を見たのであるが、この時も亦空軍の威力と價値といふものを痛感したのである。

フィンランドは、人口がソヴィエトの五十分の一しかない小國であるから、その空軍と云つても數へるほどしかない。戰鬪隊、所謂驅逐隊であるが、それも第一線に出るのは僅か一中隊か二中隊位で、これは主として本當の戰場に於て敵の爆撃から護らなければならぬ重要な軍隊を護るのにも精一杯なところで、戰線の後方の地區にはこの驅逐隊といふものが全然なく、全く無防備の狀態であつた。

また火砲なども極めて貧弱で、而も大部分は第一線の戰鬪に使用され、首都ヘルシンキに置かれた高射砲は僅か數門を數へるに過ぎない狀態であつた。彈丸も不足してゐるので、敵の飛行機が低く降りて來て確實に命中するといふ見込がついた時でなければ、射たない。故に、ソヴィエトの空軍は全く傍若無人に、思ふがまゝに暴れ廻ることが出來たのである。

大體爆擊法といふものは、普通下から射たれるとか又は敵の戰鬪機の脅威があるといふ場合に於ては、早急に目標を狙つて降下し、パツと爆彈を落してサツサと彼方に逃げ去るのが常法である。ソ芬戰線に於けるソヴィエト空軍はさういふ心配は少しもないので、目標の上空に來て悠々と旋廻し、幾回も目標を測り直してこれでよしといふ時に投彈して飛び去るといふ餘裕綽々たる戰爭が出來たのである。

有名なハンゴといふ港がある。當時私は其處に實際行つて見たのであるが、そこで痛切に感じたことは、制空權もなくまた防空施設もない國家が、敵の空軍に襲はれると、實に悲慘な結果を生ずるといふことである。地上から何も應戰することが出來ない。たゞ敵に射たれ毆られ放しといふ狀態であるから、これほど悲慘なことはない。

併しソ芬戰に於て、あれだけ勇敢に戰つたフィンランド人といふものは實に偉いと思ふ。避難民は列車に乘つて郊外に行く。列車が停止すると、乘客は强制的に敵の爆擊を避けるために造つた防空壕の中に入れられ、その中で一時間でも二時間でも靜肅に待つてゐるのであ

めに造つた防空壕の中に入れられ、その中で一時間でも二時間でも靜肅に待つてゐるのである。敵の飛行機がまた來襲するかも知れぬので、結局フィンランド全土に機影を認めずといふことになつて初めて空襲警報解除されるので、それまで待つのである。さうして解除になつて外に出てもまた敵の飛行機が來ると再び空襲警報が發せられ、そこでまた所定の防空壕に逃げ込む。そこでまた一時間位待つて解除と共に外に出て來る。食事中であつたものは、料理もスープもみな冷えてゐるので、給仕が來て再び料理を溫める。かういふ慘めな生活をしなければならぬのである。

これを要するに、空軍といふものがなかつたならば、現代の戰爭は成立しないといふ事が出來る。劣勢な空軍を持つてゐる戰鬪又は敵に制空權を握られた場合は、戰爭といふものは非常に困難なものとなる。私は制空權を相手國に握られたならば戰爭をするなといひたい。戰はもう負けたと云ひ得ると思ふ。

次に此の機會に於いて若干ソヴィエトの航空の狀態に就いて述べてみたいと思ふ。御承知の如く、ソヴィエトは、例の産業五箇年計畫其他から航空といふことに對し非常に力を入れて來たもので、戰前の評判では、質のことは別として、量に於ては恐らく世界第一ではあるまいかとのことであつた。このソヴィエト空軍の狀態を最も適切に表現したのが、例の有名な航空日である。

毎年八月十八日頃に航空日が制定されてをり、モスコー郊外のツシノのと云ふ飛行場に於て全國的、國家的行事である航空日が開催される。これは私共にも重要な事なので、見に行つたのであるが、初めてその實況を見て、豫想外に立派な航空日の狀態に、全く吃驚した。東京に於ても我國航空界で時々航空日を開催するのであるが、その規模に於てその參加機數に於て、實に雲泥の相違がある。當日は國家の行事も全部休み、モスコー市民は勿論、全國

に於て、實に雲泥の相違がある。當日は國家の行事も全部休み、モスコー市民は勿論、全國の人々が悉くツシノ飛行場に來て、その周圍を十重、二十重と取卷く盛況である。勿論全世界の各國の飛行機に關係ある人が招待されて行く。

先づ第一に驚くことは、彼國の航空の素晴らしいことである。民間航空機が數百機も列をなして、分列したり、或は空にスターリン・レーニン等の文字を飛行機で描いて上空を舞ふのである。それが悉く軍用機ではなく民間機である。あれだけの數があることも驚くべきことであるが、あれだけの編隊飛行の出來る民間操縦者を持つてゐるといふことも、亦何と云つても我國よりも數等優れてゐると云ふことが出來る。この編隊飛行をするのは僅か小部分の民間航空界の人達で、その次に現れるのはやゝ高級の飛行機で盛んに高等飛行を演ずる。これらの高等飛行なども、軍隊の一流飛行士に劣らぬ立派な飛行振りを發揮するのである。

次に私共の驚いたのはグライダーである。私が渡歐する迄は、日本ではグライダーといふものが頗る貧弱で、また一般のグライダーに對する知識も全然ないといふ狀態であつた。と

ころが、向ふでは五、六機から八、九機の編隊のグライダーが一つの飛行機で同時に牽いて離陸する。而も整然たる間隔を保つて實に見事に離陸する。その離陸振りを見た時私は、全く驚いたのである。それが飛行場の上空三千米位の所で綱を切ると、各〻その列をなして、所謂高等飛行、グライダーの離れ業をどん〳〵やつて飛行場に着陸するのである。こ點など遺憾ながら我國は未だ〳〵ソヴィエトやドイツに遙かに劣つてゐることを斷言し得るのである。

最後に所謂ソヴィエトの最も得意とするデザント、即ち航空落下傘降下を演ずる。その落下傘降下の狀態は實に見事なものである。

大型の輸送機に各〻數十名の兵隊を乘せ、飛行場の上空に行くとさつと一齊に飛下りる。飛び下ると同時に、一面に綺麗に花を鏤めたやうに落下傘が浮び上る。落下傘には色々な色が塗つてあるので實に綺麗である。それがよく距離を測つてあるので、悉く飛行場の狹い範圍に着陸する。その有樣は、彼等が世界に自慢してゐるのであるが、全く自慢の價値があると思ふ。この落下傘については、彼の國であるから實に徹底した教育が施されてゐる。私共

と思ふ。この落下傘については、彼の國であるから實に徹底した教育が施されてゐる。私共が街を歩くと大抵の男も女も左の胸に落下傘の徽章を著けて得意に歩いてゐるのに到る處で會ふ。この徽章を著けてゐるのは、總て落傘下講習の修業者である。本當に空中から落下傘で飛び下りた經驗者であることを示してゐるのである。その數は何十萬、恐らく百萬人以上もあるかも知れない。それが果して日本には何人居るであらうか。顧みてまことに殘念なことである。これも矢張急拵へでは駄目で、平素からしつかり準備し訓練しなければ、戰時に當つては何等役に立たないものであることを知らねばならぬ。

また民間航空に就いても同樣である。御承知の如く、歐洲の各天地は、民間航空の航空網に依つて航空路は網の目の如く張られてゐて、何處に行くにも自由自在に飛行機の利用が出來る。有名なドイツのルフトハンザの航空網の如きは實に素晴らしく發達してゐる。丁度我國の東京驛で省線電車が立ち代り入り代り發着してゐるやうな狀態で、各飛行場の飛行機が去來するのが見受けられる。僅か午前に一回、一日に一回といふ飛行機ではない。

また飛行場に於ても所謂ラヂオ・ビーコンの設備が十分に出來てゐるので、例へば空が密雲に蔽れてゐても何の躊躇もなく飛び立ち、或は着陸する。天候が惡いから飛び立たないといふことは殆どない有樣である。

私は或る時リガとスウェーデンのストックホルムの間、あのバルチック海を越えたことがある。スウェーデンの方からリガに近づくに從つて雲が出て來て、先に行くに從つて雲が濃くなる。私は早く雲の下に出なければ着陸が出來なくなるのぢやないかと心配した。日本の航空機ならば必ず雲の下に出る。そのためよく新聞で見るやうに、鈴鹿山脈迄行つて雲の上を越せばよいのであるが、鈴鹿山脈にはさういふ雲が續いてゐるので、仕方なしに雲の下へ何とか拔けて行かうとするので、非常に苦勞をする。已むなく羽田に引返すといふことになる。私は日本の狀態で經驗してゐるのであるから、どうなるであらうとか心配した。たうとうリガの上に來たと思ふくらゐのところで、機首を下してぐつと突込んで行く。約十分ぐらゐ雲中飛行をしてゐると、雲が薄くなつて下が見える。三百米位の下を見ると、そこはリガの飛行場の眞上で一旋回して後は着陸すればよいのである。實に設備がよい。これは所謂ラ

の飛行場の眞上で一旋回して後は着陸すればよいのである。實に設備がよい。これは所謂ラチオ・ビーコンに依つて導かれるから安心して雲上飛行が出來るのである。ソヴィエトの多くの重要な飛行場へ着陸する場合も皆同様で、更に技術の進んでゐるドイツに於ては無論雲を衝いて着陸するといふことは實に極めて自由にやつてゐる。實際向ふの飛行機に依る旅行は、何等危險な心配もなく、樂で早いのであるから、私なども始終飛行機を使つた。賃金もまたさう日本のやうに高いものではないのである。

かういふやうに、ドイツやソヴィエトの航空の狀態は、何と云つても我國、殊に戰前の狀況に較べると遙かに進んでゐたといふことが出來る。

幸ひわが日本もこの事變を契機として航空の狀況が飛躍的に發展した。私が僅か二年有餘日本を留守にしてゐるうちに、以前と較べて劃期的な進歩をした。併し未だ〲「追ひ付け追越せ」の覺悟が必要であらうと思ふ。

（二） 機械化部隊の活躍に就いて

空軍と相俟つて戰爭の推移に重大なる影響を及ぼしたものにドイツの機械化部隊を忘れてはならない。ドイツ機械化部隊の優秀性は戰前既に周知の事實であつたが、實際に本戰爭に活躍したところを見ると、全く感服に堪へないものがある。戰爭の始つたのが九月一日で、九月八日には既にその先鋒がワルソーに郊外に到達して居り、吾々はワルソーの大使館内に於いて、既にその日の夕方郊外に砲撃の轟くのを聞くに到つたのである。この間ポーゼン及びクラコー方面には未だ獨波兩軍の戰線があつて相對峙して居たのであるが、これ等機械化部隊はこの戰線を突破、挺身して敵の首都近く迫つて來たのであつた。實に勇敢と云はうか無謀と云はうか、作戰の要求するところ水火も辭せざるナチス精神の現はれを見ることが出來るのである。斯くの如くドイツ軍はその優秀なる機械化部隊によつて、隨所にポーランド軍の戰線を突破し、これを分斷し、各方面にポーランド軍を包圍し、これを各個に擊破する作戰に出たのである。その作戰指導の重大なる役割は、實にこの機械化部隊によつて演ぜら

作戰に出たのである。その作戰指導の重大なる役割は、實にこの機械化部隊によつて演ぜられたのである。然しながら彼等が斯くの如く勇敢に行動するため、時には後方聯絡を斷たれ悲慘なる戰局に陷つた部隊も少くはなかつた。レンベルグ方面に向つた一挺身隊の如きはその一例で、遂に後方との聯絡は遮斷せられ同地附近において全滅の悲運に逢つたのである。然もかゝる戰況の生起することは豫想せらるゝものあるに拘らず、毫も恐るゝことなく、命令の赴くところ敢然として突進して來るその精神には、實に鬼神をも泣かしめるものがあるのである。

抑〻近代軍の裝備としては、この空軍と相俟つて優勢なる機械化部隊をもつと云ふことが絕對必須の條件であつて、現代における第一流の陸軍と云ふものは、その重要なる軍隊の大部分は悉く機械化せられた部隊であると云つても過言ではない。この點特殊な種々の事情から一概に論ずることは出來ないが、吾が陸軍の軍備においても、從來あらゆる關係から陸軍の企圖する機械化が出來ないので非常に焦慮して居たのである。然る近時逼迫せる國際情勢

よりその急速なる整備の絶對的必要性が各方面から認められ、その實行を見るに到つたのは洵に喜ぶべき現狀であると云はなければならない。吾々がソヴィエト、ドイツ、フランス等これ等各國の軍隊を見る時、殊にその觀兵式を觀て痛切に感じさせられるものは、その機械化部隊の優秀さである。堂々繰り出して來るその機械化部隊の偉容には、全く眼を見張らしむるものがあるのである。大體向ふの觀兵式と云ふものは、今迄日本でやつて居つたやうにテクテク步いて行くものや、馬に乘つて行く部隊と云ふやうなものは極めて少數で、大部分は悉く機械化部隊である。數時間に亙る大觀兵式に於て眼の前を過ぎるものは唯自動車であり、裝甲車であり、タンクであり、機械化された各種火砲である。それが數時間に亙り蜿蜒として後から後からと續いて來る有樣は實に壯觀の極みである。もとより軍隊の精銳と云ふものは、その根本をなすものは實に精神力であることは千古不磨の原則であり、且つ最も重視すべき點であるが、近代の如く科學が大いに進步し、それに伴つて兵器の進步の著しい今日においては、これ等機械化部隊、戰車等、物質的偉力も決して輕視することをゆるされないのである。彼の勇敢なるフィンランド軍が、遂にはソヴィエト軍の前に兜を脫がねばなら

いのである。彼の勇敢なるフィンランド軍が、遂にはソヴィエト軍の前に兜を脱がねばならなくなつた最大の原因は、實にこの兵器の劣惡と云ふ點にあつたのである。

ポーランド軍がその地形が西歐洲の如き交通路の四通八達の地でなくして、吾が滿洲におけるが如く畠、畑地が多く、道路は發達せず、一朝雨でも降れば泥濘となつて機械化部隊の行動に適しないとの理由をもつて、近代軍隊の精華であるこの機械化部隊の整備を怠つて居つたと云ふことは、何としても今次敗因の重大なる原因である。現代の進歩せる機械部隊にあつてはある程度まで地形の困難をも克服し得るものであり、將來においては尙更、如何なる地形においても行動が容易なものとなるであらう。

彼のポーランドが世界に誇る大騎兵集團を有ち乍ら、空しく一敗地に塗れたことは吾々に深い敎訓を與へるものと云はなければならない。

（三）砲兵の重要性に就いて

近代戰に於ては空軍及び機械化部隊が必要缺く可からざるものであると同樣に、砲兵も又絕對必須の要素である。砲兵が戰鬪に於て常に重要なる役割を演じ、時としては決定的役目を果して居るのは歐洲大戰以來近代戰に於ける特長である。かの第一次歐洲大戰の際にも、獨軍が赫々たる戰勝をあげた各種戰史を調べて見るに、常に砲兵が絕對優勢である事が見られるのである。この點に關しては世界兵學界の定評のあるところで、列强が擧つて砲兵の充實に努め、特に威力の强大なる砲兵を裝備する事に汲々として居る所以である。然るに幸か不幸か滿洲事變以來我國が戰つた敵は裝備に於ては敢て優秀と云ふことの出來ない敵である。殊に砲兵力に於ては全く微力なものであつた爲に、我が軍としても、又我國民としてもこの近代戰必須の要素たる砲兵と云ふものに對する認識が、動もすれば疎んぜられる氣味であるのは甚だ遺憾なことであると思ふ。

ドイツ軍は、その經驗せる戰史と、理論的に割出した戰法からして、砲兵の價値と云ふものを重要視し、遙に他國を凌駕するところの立派な砲兵を編成して居つたのである。殊に威力の大きな砲兵と云ふものに對して大なる關心を持ち、强力なる砲兵の裝備に最も力を注い

力の大きな砲兵と云ふものに對して大なる關心を持ち、强力なる砲兵の裝備に最も力を注いだのである。御承知のやうに、砲兵には種々種類があるのであるが、今迄世界一般に軍の砲兵の主體となるものは七十五ミリ口徑の野砲であつたのである。然るにナチス陸軍がその軍備再建を目指すや、ドイツ全軍の砲兵から野砲を悉く廢して、それに代ふるに十サンチの輕榴彈砲をもつてしたのである。この一事は實に劃期的な英斷であつて、當時各國陸軍の識者をしてアツと云はせたところのものである。然るに今次の戰爭に際會して見ると、この劃期的な英斷は實に肯綮に當つて居つたのであつて、この威力ある野戰砲の裝備がドイツ軍の決定的勝利に寄與したところ實に大なるものがあつたのである。

抑々砲兵の威力と云ふものは、彈丸そのものゝ破壞殺傷する效力と、爆發した音響による精神的效果の兩方面を考へなければならないのであるが、前記の野砲に比べて、此度の輕榴彈砲が、遙にその兩者の效力に於て勝つて居ることは周知の事實である。實際戰場に於ては殊に多少戰爭に馴れて來たものに對しては、小さな火砲の威力ぐらゐではその士氣を挫折し

その軍隊を潰亂に陷れることは困難である。ドイツがよくこの點を狙つて强力砲兵の裝備に努めたのは、實に先見の明ありと云はねばならぬ。ポーランドの步兵は、兵そのものは實に勇敢によく戰つたのであるが、ポーランドの軍隊は舊態依然として野砲を主力として備へて居つたのである。これがため、輕榴彈砲を主體とした質に於ても又量に於ても遙に優勢なる獨軍砲兵のため、全く壓倒し去られたのである。戰後これ等の戰史に基いて各國が、殊にソヴィエト赤軍が獨逸に倣つて榴彈砲を軍の砲兵の主體とするに至つたことは、大いに注目の必要があると思ふ。なほ砲兵の威力增加と云ふことに就てはこれ等十サンチ級の輕榴彈砲に止まらず、更に大なる火砲卽ち十五サンチ級のものを師團の砲兵の中に編入し、更に進んではこれを師團砲兵の主體とせんとする傾向すらも窺はれるのである。繰返して云ふが、砲兵が優勢でなければ近代戰に於て勝利を求むることの困難であることは、既に議論の時代を通り越して決定的事實である。この砲兵の威力と云ふことに關しては、我が軍に於ても頂鼓峯事件或はノモンハン事件等に於て相當の經驗をもつて居るのである。然し依然としてその砲兵

の威力に關する切實なる體驗を歐洲に於ける各國程もつて居らない關係上、動もすれば等閑視し勝ちな傾向にあるので、この點特に深く戒めなければならないと思ふ。更にこの砲兵も前項に於て述べたと同樣に、列强に於ては殆んど總て機械化されて居る。火砲の威力が大きくなればなる程重量も增して來るので、當然機械化されて來ることは、自然の傾向である。即ち軍の機械化と相俟つて砲兵の機械化、特に列强に一步先んじて、自走式砲兵、砲兵そのものが戰車のやうに或は裝甲自動車のやうに、且つ擊ち且つ走ると云ふ新銳なる武器をもつて裝備するが如き覺悟をもつて進まなければならないと思ふ。

いま一つ砲兵に就て注意すべきことは、防空或は對空と云ふことである。砲兵の弱點は何と云つても空にある。ポーランド戰線に於ても前述せるドイツ空軍の活躍によつてポーランド砲兵の大縱隊が道路を行軍中、ドイツ襲擊飛行機の空襲に遭ふや、蜿蜒數キロに亙るこれ等砲兵の大縱隊が、全く爲す處なく路上にその殘骸を曝すに至つたのは各所に見受けられた光景であつた。これに對し、私がワルソーに居てドイツ砲兵の行進を見たのに、例へば一箇

中隊の砲兵が行軍をして來る場合、先づ中隊長が先頭に立ち指揮をして來る。その後に續くものは大砲でもなく觀測者でもなく、實に空に向つた對空射擊機關であつたのである。而もこれ等の對空射擊機關は、常に砲手が車上で射擊姿勢にあつて引金に指を添へ、何時でも射擊の出來るやうな姿勢でそのまゝ行進して來るやうな、實に戰備嚴重なる對空射擊機關であつたのである。斯くしてこそ始めて砲兵の對空的弱點が除去せられ、その活躍が期待出來ると思ふ。即ち以上述べた處を要約するに、砲兵としては威力强大なるものを裝備すること、その量を多數備へること、優秀なる機械化裝備であること、並に對空の考慮を充分にすること等であつて、これ等は實に近代砲兵の具備せねばならない必須の條件であると思ふ。

（四）築城の重要性に就いて

築城の重要性と云ふことに關しては、古來各名將の稱へる處であつて、何等議論の餘地のないところである。只玆に素人的に考へて注意すべきことは、動もすると築城と云ふことは防禦的、防勢的に使用せられるものであつて、攻擊的、即ち强者の好んで使用すべきものではない、と云ふやうに考へられることである。これは大なる誤であつて、强者であればあるほど、攻勢的であればあるほど、なほのこと築城と云ふことは極めて重要なものである。これを今度の戰爭の例にとつて見ても、ドイツが西方攻勢をとるに當り、かのジーグフリードラインと云ふものは、實に立派に攻者にとつての築城の任務を果したものである。更にポーランド戰の場合を考へて見ても、ジーグフリード線が嚴然としてあつたからこそ、ドイツ軍は安心して東方作戰に專念し得たのである。然るに弱者であるポーランド軍の築城はどうであつたかと云ふのに、これは極めて貧弱なものであつたのである。もとよりポーランドとしては對ソヴィエト作戰に重點をおいて居つた關係上、築城の主力と云ふものは東正面、即ちソ波國境方面に集中されて居つたが爲め、獨波方面の築城がこれに伴はなかつと云ふことは

認めてやらねばならないと思ふ。然しながら、獨波關係の緊迫して來たのは、數箇月否十數箇月前よりこれを豫想し得たのであるから、若しポーランド軍に於て築城の重要性と云ふことを認識し、これが編成に全力を盡したならば、今少し確りした築城が出來たはずであると思ふ。ポーランド軍が比較的力を盡して構築したと思はれる東プロシヤ國境方面における築城を見てさへも、極めて粗末なものであつて、處々に鐵筋コンクリートのトーチカが散在して居るのであるが、これ等の中間地區は殆んど何等の設備もなく、ドイツ軍の猛襲に會ふや一兩日にして簡單に突破せられるに到つたのである。これに反して同じくプロシヤ方面においても、攻撃をする側のドイツ軍の方の築城はどうであつたかと云ふのに、吾々が自動車で國境を通過する場合に望見し得られる範圍内においても、實に立派な近代的築城が、國境に沿つて連綿として續いて居るのが見られるのである。對戰車障碍物にしても、各砲壘にしても、ジーグフリードラインと迄は行かなくとも、相當に堅固な立派な近代的築城である。戰後戰跡を案内したドイツ軍の將校が各國武官に、兩者の築城を比較してどう思はれますか、

と云つて微苦笑したところであるが、尤のことであると思ふ。

抑々築城と云ふものは若しこれを造るならば絶對に信頼し得る程度の堅固なものたらしめないと、時に反つて害のあることが多い。フランスが彼のマヂノ線に頼り、その堅固さに信頼して安心をして居つたところが、その實セダン附近の弱點をドイツ軍に急襲せられるや一擧に突破せられ、その結果は例のフランドル方面の大殲滅戦を受ける重大なる原因となつたのである。築城はその本質上、これによつて敵の進攻を絶對に阻止し、兵力をこの方面で節約して、吾の決戦を求めようとする方面に徹底的に兵力を集めようと云ふのであるから、若しその信頼を裏切つて、この築城のある方面で敵に敗れるやうなことがあつては、實に全軍の作戦計畫に大なる齟齬を來すのは明らかなる事實である。

由來吾國の國民性として、築城によつて敵に對するのは、只何となく好ましからずと感ぜられて來たのであるが、これは用兵上大なる誤である。今や、吾が日本も大陸において諸外國とその國境を接し、從來の島帝國から離れて、歐洲列强の如く接壌國となつたのである。

殊に北滿においてはその傾向最も顯著である。故に我國としても、今やこの築城と云ふ問題は決して忽にならない問題となつて來たのである。然るにこの築城と云ふものは極めて高價な費用を要するにも拘らず、而もそれが或は飛行機を造るが如く、或は戰車を造るが如く、目に見える戰力の增加を來さない爲に、この高價な費用を目に見えぬ地中に埋めて了ふのは動もすれば甚だ惜しいやうな氣がするのである。從つてどうしてもこの築城と云ふものが、前記の國民性と相俟つて、我國においては閑却されやすい傾向をもつて居るのである。從つて前述せる戰史の示すが如く、中途半端な築城と云ふものが如何に有害であるかと云ふことに想到した時、築城をやるならば斷乎としてこれを行ひ、充分信頼の出來るものたらしめなければならない。

强者であり、攻勢的企圖をもつて居つたドイツ軍が、開戰後においても尙孜々營々としてジーグフリード線の强化に努め、防者であるフランスのマヂノ線以上に、これを凌駕した强固な要塞線としたことは、實に吾々に重大なる教訓を與へるものと思ふ。

（五） 以上に對する觀察

以上は獨波戰爭に際して私が目擊した有樣を記述したのであるが、玆で何故にポーランドが斯くも脆く敗滅し去つたかを改めて再檢討することは、甚だ有益であり且つ興味ある事と思ふ。固より獨軍の精鋭强力であつたことは重大なる原因であるが、私が實際に觀戰したポーランド側よりこれを觀察すれば、大體左の諸點に歸納することが出來ると思ふ。

形而上の原因

（一） ポーランドが自己の實力を辨へず、國力を過信して驕慢となつたこと、即ち自己の實施した宣傳に自ら醉ふの愚に陷つたことである。戰前ポーランドは國民の士氣を鼓舞するため極端な自己讃美の宣傳を爲し、その上、第一編に於て述べたる如き國民性が禍ひしてその宣傳に乘ぜられ、遂には宣傳そのものの如き實力を有する如く錯覺するに至つた。而してこの錯覺は、一般大衆のみではなく、漸次宣傳の本家である政府並に軍首腦部にまで感染し

て、戦争直前に於ては全く病膏肓に入り、救ひ難い狀況に在つたのである。一般大衆は別として、知識階級や政府の首腦部が宣傳に禍ひされて自己陶醉に陷るが如きは、一面信ぜられぬところであるが、ポーランドに於ては現實にその情况を呈したのである。この點は大いに考慮すべきものであると信ずる。前にも述べたるが如く、僅か許りの海軍を有し乍ら、烏滸がましくも英國と海軍比率協定を締結し、これを國民に宣傳して、恰も世界一流の海軍國と同樣の實力あるものゝ如く國民に錯覺を起さしめ、ワイクセル河で觀艦式を擧行して「我が艦隊」を謳歌したるが如き、實によくポーランド國民性を表してゐるもので、この一事を以てしても國民性の全貌を察知し得るものといふ事が出來る。而して更に恐るべきはこれ等の宣傳が逐次その度を增し、遂には知識階級を始め政府の要路者にまで感染してポーランドは本當に優秀なる實力を有するとの自己陶醉に陷るに至つた事である。この「驕慢」こそ本戰爭敗因の最大原因であつて、後述する爾他の敗因もその源は悉くこの點に存してゐるものと認め得るのである。この結果生じた侮獨、侮ソの情況は、恰も日支事變前に於ける支那の侮

日と全くその軌を一にするものであつて、誤れる宣傳の如何に恐るべきものであるかを痛切に感ぜざるを得ない。眞に戒心すべきである。

而もこの國民性の缺陷は、敗戰後の今日と雖も尙是正されず、卽ち眞に敗戰の非を悟り、その原因を探究して、更に多難なる將來に備ふるが如き氣魄は毫も見受けられない。而して云ふ。「ソ聯の侵入なかりせば、ドイツが如きに敗るるものに非ず」「對ソ準備は萬全なりしも對獨準備の不十分なりしため今回の敗戰を見たり。若し對ソ一戰せば眞に鎧袖一觸のみ」「フィンランドは對ソ戰なるが故に相當に戰ひ居るも、近日中に覆滅すべし（フィンランドの勇戰は彼等の最も苦汁とするところで、決して之を賞讃しない）」「日本は支那に於て何時迄ぐづ〳〵なしつゝあるや」等である。全く濟度し難しといふの他はない。

またこの砂上樓閣式「驕慢」より發した總ての行動は、一應は外見上極めて豪快勇猛の如く見えるのであるが、一度障碍に遭遇するか、或は打撃を受けるかすると、恰も崩雪の如く壞滅崩壞してしまふのが常である。

實に此の「驕慢」こそポーランド敗因の最大缺陷であり、更に又その源が誤れる宣傳に存したることを考ふる時、我國としても大いに戒心すべきものであると思ふ。

（二）よもや戰爭にはなるまいと期待せることである。

ポーランド軍民は前述せる自己陶醉と相俟ち、戰爭直前まで、眞に一戰を覺悟し國難に當るといふ眞劍味が充分看取せられなかつたのである。軍を動員し兵力を集中し、一見戰時態勢を整へたるが如き觀を呈したが、これは極めて皮相な戰時態勢であつて、內政に關しては何等戰爭準備と見るべきものなく、戰時法令の發布、對空防禦の施設、防禦築城の構築等、殆ど等閑に附せられた感があつた。

斯くの如く虛勢を張るのみで、眞に祖國の名譽のため玉碎を期する根底ある眞劍味を全く缺如してゐた。その上、英波同盟の締結、ヒトラーの無血政策、ドイツの國內情勢等から觀察してドイツもこの際兵力に訴へてまでもダンチヒ問題を解決する覺悟はあるまいし、從つてポーランドも或る程度迄の戰時態勢を示したならば、結局最後は外交的に折衝し得ると考

へたやうである。この期待が最後まで根強くポーランド政府の頭腦を支配し、而もこの期待が漸次現實の事象化して考へられるに至り、遂に開戰直前までこの觀念を脫却し得なかつたのである。

從つて九月一日の獨軍の大攻勢は、考へ方に依つては全くポーランドの虛を衝いたものといふことが出來、政府を始め統帥部も周章狼狽爲す所を知らず、參謀本部の如きも二日に郊外の某學校に移轉し、四日には既に首都を捨てゝルブリンに移り、同地が獨空軍の猛烈な爆擊に遭ふや、一晝夜も逗留することなく、再び更に東方に退避するなどの醜態はまことに見るに忍びなきものである。開戰四、五日で既に統帥部が轉々退避する狀況では、如何にして百萬の大軍の統帥が出來るであらうか。

また眞に戰爭必至の覺悟のなかつた證左としては、當時尙全軍の動員が未完了であつた一事を擧げても明かである。卽ちポーランドは平時約三十箇師團、戰時にはこれが半數を二倍に動員し、總計約四十五箇師團を有する計畫であつた。從つて眞に一戰を覺悟してゐたなら

ば、これたけの兵員は動員を完了してゐなければならぬ。

殊に獨波の緊迫狀態はこの春以來のことで、夏以來は益々險惡化し、兩國共に屢次に亙る動員をなし、時間的にも十分の餘裕のあつたことである。然るに實際に於て右可能動員約十五箇師團中、約十箇師團が動員完了せず、開戰當時尙も後方にて編成中で、それ等の師團は遂に最後迄殆ど戰爭に參加することが出來ずに潰滅するに至つたのである。「ベルリンへ、ベルリンへ」と豪語した强國が、この有樣では、如何にして勝つことが出來るであらうか。

(三) 全く統帥を誤つたことである。

ポーランド軍の集中を見ると、これは全く强者の戰法である。彼我の實力を知り且つ戰術の一頁を繙いたものならば、かゝる戰法は取らなかつた筈である。卽ち最も常識的に考へるならば、大體に於てワイクセル河の線を確保し、北方はモドリン、ワルソー、中央はラドム、ルブリン、南方はクラコウ又はプルゼミスル等を據點とし、所謂機動攻勢に依つて持久防禦を策するを至當とし、これがため獨波國境附近に輕師團を配置し、逐次抵抗せしめるのを可

とする。假に一歩を讓つて今少しく積極的に出るものとすれば、開戰當初に極めて優勢な兵力を東プロシヤ方面に集中して一擧に之を屠り、ダンチヒ、グデニア附近、ワイクセル河迄進出して右翼の據點を構成し、爾後前記第一案の要領を以て持久を策すべきである。況んやポーランド參謀本部は、東プロシアに在る獨軍兵力は僅か九箇師團に過ぎず、眞に鎧袖一觸のみと豪語してゐた狀態に於て特に然りである。

然るに實際に於ては東プロシア正面、ポーゼン正面、及びクラコウ正面に、各〻十二、三箇師團を宛ら平等に配置し、殊にその主力たるポーゼン兵團が北方廻廊方面に對し攻擊を取るが如き方策に出て、遂には本兵團が其退却の機を失し、クトノ附近で殲滅される最大原因を作つたのである。抑〻かうした非常識な作戰計畫を樹立するに至つた原因が奈邊にあるかは、頗る諒解に苦しむところであるが、これも亦畢竟自己の實力の過信と驕慢の結果であると斷言せざるを得ないのである。而して更に笑止なのは、平素豪語する優勢なる波軍が東プロシア九師團のため却つて壓迫され、遂にモドリン及びワルソー東方を包圍さるゝに至つた

ことである。

聽くところに依れば、參謀總長シタケウチ﹅チ將軍は、戰術家として令名高い人であるが斯くも悲慘なる結果に陷り、最も愚將として醜名を後世に殘すに至つたのは、彼のため憐憫の情を禁じ得ないものがある。

（四） 政府首腦部に其の人を得ざりしことである。

ピルシュスキー元帥の死後、その後繼者として元帥の位に卽いたのは、現スミグリー元帥である。彼はポーランド獨立戰爭の當初からピルシュスキー元帥の片腕として活躍した一代の革命兒であつた。外相ベ﹅クも亦革命戰當時の參謀將校で、頭腦明晰、果斷、優秀なる爲政者であり、參謀總長シタケウチ﹅チも同樣である。斯くの如く實際に國政を執つてゐた三巨頭は、孰れも優秀な人物で、獨立戰當時は相携へて彈雨の下を潛り生死の巷に祖國のため生命を抛つて活躍した志士であつた。而してポーランド獨立後僅か二十年を經た今日、今次の獨波戰爭に於ける彼等の動靜は如何なるものであつたらうか。その實情を知る時、うたゝ

感慨無量のものがある。
抑々その醜狀に關し說述すれば、枚擧に遑なきほどであるが、彼等國家の三巨頭が危機に瀕した祖國を捨てゝルーマニアに逃走したのは、實に九月十七日の夜であると云ふ事實に依つて遺憾なく說明が出來るものと思ふ。卽ちソ軍がポーランド侵入を開始したその當夜、既に逸早く國外に逃亡したのである。而もその逃走振りたるや實に堂々たるもので、スミグリー元帥の如きは、家財道具を滿載したトラックの縱列を隨へ、夫人同伴で宛ら大名旅行の如き感があつた。而してルーマニア國境に到達するや、同國の國境守備隊に對し「余はポーランド元帥である。宜しく元帥の禮を以て迎へ、儀仗兵を附せよ」と豪語し、ルーマニア將校より「貴官も現在はルーマニアに逃入せる一俘虜なり」と喝破されたることは、餘りにも有名な話である。ベック外相も亦巨萬の富を擁してルーマニアに逃避し、その豪奢なる生活振りは屢々新聞紙上に報道され世に顰蹙を招いたのである。
二十年前の憂國の志士が、今日かくも變化した原因を考へる場合、私共は深く反省しなけ

ればならぬと思ふ。

（五） 統帥者、參謀將校及び將校の養成を誤つたことである。

統帥者その人を得ず、作戰計畫の根本から大方針を誤まり、敗戰の一大原因を作つたことは前述の通りである。而してこの風潮は下級部隊に至るまで悉く侵滲してゐたのである。未だ戰史の明確なるものに接しないので、斷定することは出來ないが、例へばクトノ附近の殲滅戰の如き、十數箇師團のポーランド軍がオメオメ捕捉されるが如きは、私共の到底理解することが出來ぬところである。而もその現場を實見すると、殆ど激戰らしい激戰の跡がない。

又九月七日頃には既に獨軍機械化部隊の先鋒はワルソー郊外に達した。この時ラドム附近に於て五、六箇師團のポーランド軍が全く包圍されて苦戰中であり、クトノ附近のポーランド軍も亦苦戰中であつた。而してワルソー、モドリン間には尠くとも約五、六箇師團のポーランド軍があつたのであるが、僅か百粁足らずの地點に於て友軍が苦戰中なるに拘らず、敢て救援の擧に出でなかつた。當時ワルソー西部にあつたドイツ軍は極めて少數であつたので、

若しポーランド軍が敢然として突撃したならば、優にこれを撃破して友軍と連絡し得た筈である。統帥部は果して何をしてゐたのであらうか。たとひ中央統帥部の命令なくとも、各軍司令官は當然獨斷專行すべき時である。然るに拱手傍觀、友軍の殲滅されるのを目前に控へて何等爲すところがなかつたとは、これ亦私共の諒解に苦しむところである。

以上統帥部に就いて述べたのであるが、各部隊の幹部も亦同様であつた。一度開戰となり優勢な獨空軍の熾烈な爆撃を受けるや、指揮統帥全く混亂に陷り、甚しきは將校が先を爭うて逃走し、兵のみが戰場に殘つて茫然としてゐる有樣である。ドイツ軍の將校から聽いたのであるが、ポーランドの兵は實によく勇敢に戰つた、たゞ惜しむらくは將校にその人を得なかつたと云つてゐた。

以上に依つて、ポーランド軍は兵が優秀で裝備も相當であつたにも拘らず、斯くも悲慘なる敗戰を喫した原因は、結局統帥部、參謀部、將校にその人を得なかつたことに歸せざるを得ない。

これを要するに、國軍練成上最も緊要なのは幹部の養成である。兵は比較的容易に得られるが幹部はさうはゆかない。私は特にこの點に留意し、國軍幹部の養成に絶大の努力を拂はなければならぬものと信ずる。

（六）他力本願であつたことである。

ポーランドは一面自力を過信し、獨力を以てもドイツに對抗し得ると豪語しながら、他面甚しく他力本願であつた。而も漠然として確乎たる成算がなかつた。試みに一度冷靜に考へるならば、たとひ英、佛が眞劍にポーランドを援助しようとしても、開戰當初果して何を爲し得るか、常識ある者ならば當然了解し得るところである。然るに漠然と英佛に依存して開戰したところに抑〻の誤があつた。果せる哉、實質に於て英、佛の援助は、何等ポーランドを救はなかつたのである。

尚この點に關しては英、佛に對するポーランドの認識の足らなかつたことを指摘し得る。狡猾な老獪な英國の現在迄の政策を知るならば、彼を信頼し自から第一線に立つの愚なるは

明かで、また幾多の戰史の例證するところである。近時漸く歐洲の各小國も對英依存の惡夢より醒め、英國の賴むべからざるを感知するに至つた。ポーランドは、その第一の試金石であつたと云はなければならぬ。

今後の國防を考へる場合、他に依存する考へは絕對に捨てなければならぬ。宜しく他を利用する立場で進むべきである。この點道義心の厚い我國としては、頗る困難なことではあるが、西洋の道德と私共の道德とはその根本精神に於て異るところに思ひを致し、大いに戒心しなければならぬことゝ思ふ。

（七）對ソ判斷を誤つたことである。

對ソ課報の權威であるポーラードがこの過失を犯したのである。玆に如何に現時に於ける課報勤務の困難なものであるかを察すべきである。殊に七、八月頃の對ソ關係は極めて良好てあつて、ソ聯大使着任のレセプシヨンの如きは、ポーランドの參謀總長始め軍首腦部も全員出席し、實に親善國の觀があつた。而も形勢一變するや、斯くの如きである。玆に於ても

前述の西洋道德の一端を窺ひ得るもので、利害の前には總てを超越する彼等の本質を深く考へなければならぬのである。

形而下の原因

本戰爭に於て最も痛切に感じたのは、現代戰に於ては、機械力、物質力等、形而下の威力を輕視してはならぬといふことである。ポーランド慘敗の原因は、前述した形而上の原因が重大なる素因をなしてゐることは勿論であるが、形而下の原因も亦極めて重要な役割を演じたのである。而してこの傾向は、將來科學の進歩するに伴つて益〻顯著になることは明かである。やゝもすればこの方面を閑却し易い我國の最も留意すべき點であると思ふ。卽ち前述せる如く、空軍、機械化部隊、砲兵及び築城等が其の主なるものである。而して此の點に關し私が命を受けて歐洲に行く前までは、實は「日本の文化も最早相當の程度に達して居る。從つて向ふへ行つても、科學的方面で學ぶ所はさう澤山はあるまい」とかう思ひ乍ら行つたのである。然るに實際向ふについて見ると、未だ〳〵日本は決して世界第一流の水準に達し

た等と言つて自惚れてはいけないと言ふことをつくづく感じたのである。

抑ゝ日本の文明と言ふものは明治維新以來急速に發展したものであるだけに、これを數百年かゝつて着々と築き上げた外國の文明に較べると未だ其の基礎が薄弱であり、且つ普遍性に乏しいものであると言ふことが出來る。言ひ換へれば、日本の物質的文明は先の尖つたピラミツトの樣なものである。卽ち各部門の其の尖端に於ては優に世界の水準に達し、又物によつては之を追越して居る所もあるのであるが、之れが社會一般に普及されて居る點に至つては遙かに歐米の先進國に及ばない所が多い。例へば、鐵道であるとか、病院であるとか、航空であるとか、船舶であるとか、各ゝ其の一流のものを取つて見れば決して之等の國々に劣らないのであるが、其等は國家施設の最高標準のものの話しであつて、一般の大衆生活には凡そ緣遠い感がする。

これ等がよく普及され一般大衆にまで行き渡つた時に於て始めて文明國家たるの眞の形を備へたものと言ふことが出來る。而もこの事實は單に一般國民の生活を幸福にする許りでな

く、之等の資源は一朝有事の際には眞に國防に供し得るのであつて、玆に始めて强度の國防國家が成立するのである。例へば前述せる航空に就いてもさうであるが、歐米に於ける自家用飛行機の發達などは素晴しいものであつて、航空雜誌や新聞等にはドン〳〵新式機の發賣廣告が出て居る。値段も高級自動車と大差ない位である。從つてこれ等はドン〳〵普及されて行く。遺憾乍ら我國では未だ一機の自家用飛行機もないではないか。又自動車に至つては最早とつくに贅澤品の域を通り越して實用品、否生活必需品の時代となつて居る。一寸した人は誰でも自動車を持つて居る。丁度我國の自轉車のそれに匹敵して居る。此の比較、即ち向ふの自家用飛行機と我國の自家用自動車、向ふの自動車とこちらの自轉車、殘念ながらこれが丁度目下に於ける彼我物質文明の比較の程度であつて、これだけ未だ我國の物質文明は遲れて居ると言ふことが出來るのである。而も前述せる樣に、これ等の物質文明がいざ戰爭と言ふ時には直に重要な國防要素となり、獨波戰に現はれた樣な結果を如實に現出することを思ふ時、決して忽にすること出來ない事項である。固より國防の最大要素が精神力にある

ことは古來不變の鐵則であるが、既に現代の程度に科學の進步した時代にあつては形而下の要素も亦重要な其の一部門である。古來精神力の優秀性を以て誇る我國としては、今や此の形而下の要素に對して力を致すべき時であると思ふ。單に精神力のみに賴つて物質威力を輕視するのは大なる誤りであつて、敵に優るとも劣らざる立派な物質威力を持つ時、我が比類なき精神力は更に一段と其の光彩を放つて至るであらう。獨逸軍の光輝ある戰勝は單に「ナチス」精神のみによつて得られたものでなく、之を輔けた世界に冠たる物質文明の力卽ち形而下の威力のあつたことを決して吾人は忘れてはならないのである。

三 ワルソー籠城

斯くて愈〻九月一日開戰、ワルソー籠城となつたのであるが、我々もこれを豫期し、豫め準備するところがあつたので、總ての動作は圓滑に實施することが出來、諸般の事項も滯りなく行つて開戰を迎へることゝなつたのである。それから後のワルソー籠城に就いては、次

に掲げる當時の日記に依つてその情勢を知られることを望む次第である。

ワルソー籠城日誌

九月一日。晴。

愈〻開戰となる。

午前六時、獨軍は一齊に國境を越えて前進を開始せる由なり。

この日屢〻空襲警報ありしも、夕刻に至る迄獨機の影を見ず。日沒近くに至り十數機の爆擊機現出し、防空火器また盛んにこれを射擊す。然れども、如何にも芝居氣多く、殊に、爆擊機の形式は正しくポーランドのPZRなり。而も殆ど投彈したる形跡なし。予は、列國の同情を惹き併せて市民の警戒心を增すための惡どき宣傳なりと斷定す。

この日、婦女子の引上げに關し、武官より提言あり。明後三日拂曉出發に決す。

九月二日。晴。

この日空襲なし。

今次の經驗に基き將來に對する參考事項を記述せば左の如し

一、戰爭來を豫期せば、速かに左記事項を準備するを要す。

（イ）「ベンジン」を出來る限り多量に購入すること。尙、「ベンジン」は平時より相當量を倉庫に貯へ置くを可とす。

（ロ）移動用のため「トラック」を購入すること。尙乘用車も必要に應じ購入すること。

（ハ）食糧品を充分に準備すること。

（ニ）瓦斯、電燈及び水道の休止を顧慮し、懷中電燈、同電池、蠟燭、石油ランプ、石炭及び飮水用「タンク」を充分に準備すること。

（ホ）標識用の白、赤の「ペンキ」及び國旗（大、小）を準備すること。

（二、三、四項は省略）

五、婦女子の避難は早過ぎるに越したることなし。若し開戰とならざれば、再び呼返せば可なり。

六、防毒面は平時より自ら準備し置くこと。

七、各人共に必ず自動車の運轉術を修得し置くこと。

九月三日。晴。

「ビドゴシチ」「チェンストホフ」陷落の報あり。

この日第一回の大空襲あり。

飛行機工場を空襲せる部隊は六機(「ハインケル」の急降下爆撃機)にして、勇敢なる急降下爆撃を實施し完全にこれを破壞燒棄せしめたり。されど二機を失ふ。損害三十三%なり。急降下爆撃は效果大なるも損害多し。若しそれ有力なる防空部隊ありせば、損害更に大なりしならん。右の中一機は武官事務室上空に至り墜落す。悲壯なりき。他の部隊は四千以上の高々度水平爆撃にて、「プラガ」方面の工場地帶及び西停車場方面を爆擊せるが如し。

九月四日。晴。

戰況益々ポーランドに非なり。

廻廊は既に獨軍の手に歸したるが如し。

この日、既に參謀本部は、平時準備せる所に基き、その位置を郊外の某學校に移動せり。

獨機は「ワルソー」の「ワイクセル」川の諸橋梁に對し盛んに急降下爆撃を實施す。勇敢にして、實に壯觀なり。一列縱陣にて、高度千四百米位より降下に入り、七百米位にて投彈す。

橋梁は堅固にして大なる損害なし。

ポーランド防空戰闘隊は何れにありや、全くその影なきを遺憾とす。

九月五日。晴。

夕刻婦女子全部引上げたり。數臺の自動車に分乘し、波ソ國境の「ストルプセ」に向ふ。

離別の情景甚だ悲壯なりき。

酒匂大使又政府の移動に伴ひ、「ルブリン」方面に出發す。

參謀本部亦この夜「ルブリン」に逃避を開始す。

開戰第五日にして既に參謀本部に「パニック」を生ず。以て如何となすや。

九月六日。晴。
武官は秘書野村氏を伴ひ「ルブリン」に赴くに決す。「ベンジン」全くなく、大いに苦勞す。夕刻漸く之を得て出發す。
小生は殘留して事務を執るべく命ぜらる。獨軍機械化部隊の先鋒既に「ワルソー」近くに到達しあるを覺ゆ。
九月七日。晴。
「ワルソー」愈〻危險に近づきたる感あり。大使より爾後の追求は中止すべき旨の命令到達す。追求せんとするも既に通路なし。昨日來「ワルソー」を出發せる列車、自動車その避難民等悉く「ワルソー」に逆行歸還す。
この日その適否疑はしかりしも、東京に對し全般の情況を打電す。文中の一節に曰はく、「開戰以來決戰と認むべきものなく、將來も亦決戰なかるべし」と。
九月八日。晴。

此頃に至り日々數回の空襲あり。獨空軍の跳梁實に傍若無人なり。波軍飛行隊如何にしありや。唯の一回も之を迎撃したることなし。

飛行場亦爆撃せられ、二箇所に炎上せるを見る。「ワルソー」より各都市に通ずる主要街道は、强制徵收せられたる市民により「バリケード」構築に汲々たり。然れども全く兒戯に過ぎず。戰術上一顧だに値するものなし。

九月九日。晴。

婦女子を送りたる一行の自動車歸還す。但し二臺は「ワイクセル」川對岸に殘置し來れり。婦女子一行は無事「モスコー」に向ひたる由なり。大使、武官の一行に報告せんとするも、全く手段なきを遺憾とす。

空襲益々猛烈を極む。既に郊外に砲聲を聽く。

九月十日。晴。

空襲頗る猛烈を極む。

「プラガ」一帶は全く火の海となる。大使館の近傍及び事務所附近にも數箇落下せり。市内到る處に「バリケード」構築せらる。

瓦斯既に止まり、石炭の貯藏量亦心配となるに至る。

九月十一日。晴。

この日頗る平穩なり。

獨機一機大使館上空にて擊墜せらる。墜落途中火災を起し、遂に空中分解し、火達磨となりて落下し、機體の破片大使館の庭に落下せり。悲壯の極みなりき。

戰線一般に平穩にして、之がため却つて流言種々傳播さる。

「ワイクセル」川對岸に殘置せる自動車も全部之を回收し得たり。

「ワルソー」放送局は第一、第二共に放送不可能となる。市中には漸く食糧難の聲高し。然るに政府は之が統制に關し何等の處置を取り居らず、將來を憂慮せらる。

市民稍々平靜を取戾したる感あり。

九月十二日。晴。

九月一日以來、連日快晴の戰爭日和なり。

昨日も今日も頗る平穩なり。一回も空襲なし。市中は市民雜沓し戰爭氣分なし。多少市民が慣れたるにも依るならん。之がため「クラカウ」「ロッヅ」の奪還等デマ頻りなり。

獨軍は既に「ワルソー」第一、「ロッヅ」「カトビッツ」等の各放送所より「ポーランド」語にて市民に呼びかけあり。夕刻に至り多少砲聲を聞く、獨軍近きに在るを思はしむ。流言に依れば「グロホフ」には既に獨軍ありとの事なり。

最初の感じにては、七、八日頃に「ワルソー」既に陷落すべしと思はれしも、矢張機械化部隊のみにしては困難なるならん。徒歩部隊の到着を待つものとせば、北方よりのもののみにても十四、五日頃となるべし。

獨軍の「ラヂオ」は既に政府の逃亡を放送しあり、「ワルソー」市民より六百名の決死隊を募集しあるも、應募の結果如何。

夜のドイツ「ラヂオ」は「プルゼミスル」及び「サンボール」を占領し、目下「ルボフ」に向ひ攻撃前進中なるを報ず。この方面には「スロバキヤ」兵團（曩に輸送せる三―四師團のドイツ軍を含む）が伺ひあるものと判斷す。

九月十三日。晴。

午前中は前日に引續き靜穩なり。

各國武官と連絡を取り情況を聽取す。波軍の評判頗る惡し。

午後四時頃より久し振りにて大空襲あり。百機以上現出せるならん。

本日より午後八時以後午前四時迄を「軍事時間」とし、市民の外出を禁止する旨布告せらる。夕刻の大空襲に引續きドイツより「ワルソー」は既に市民に至るまで武器を執り、全く武裝都市なるを以て、爾後は容赦なく全市の武裝機關に對し徹底的に爆撃、攻撃すべき旨、「ラヂオ」放送あり。

九月十四日。晴。

よく秋晴の天氣の續くものかな。開戰以來連日絶好の戰爭日和なり。

午前中極めて平穩、夕刻に至り若干砲撃の應酬あり。

ラヂオは「クトノ」附近の激戰を報ず。ポーランド軍を包圍せる獨軍も、更に「ポーゼン」方面より退却し來れる波軍と會し、相當苦戰しあるものゝ如し。

ポーランド新聞は、全方面に於ける波軍の勝利を報じあるも、恐らく局部的のものなるべし。

市民は全く戰況の眞相を知らず。比較的平穩なり。

九月十五日。晴。

午前中平穩なり。市中は人出にて雜沓しあり。何處より撤退し來れるか、市中に波軍軍隊が目立ちて多くなりたるを感ず。恐らく四、五箇師團を越ゆることとなるべし。かゝる大部隊が何故に「クトノ」附近に苦戰しある友軍の救援に赴かざるや。之を解するに苦しむ。今からにても遲からざるべし。

「ラドム」附近の捕虜六萬、大砲百數十門。北方「オストロフ」附近の第十八師團は一萬五千捕虜となる。波軍の末路哀れむべし。

夕刻に至り、南方及び東方に砲聲頻りなり。されど獨軍の應射少きが如し。

九月十六日。雨後曇。

引續き平穩なり。館員一同漸く無聊に苦しむ。小生亦久振りにて市中に買物に出掛く。正午頃に至るや俄然砲擊猛烈となり、午後一時頃事務所よりの歸途は、砲彈自動車の前後に落下し、危險極まりなし。漸く砲煙の中を潛りて大使館に遁入す。

午後の砲擊は益〻猛烈を極め、大使館の近傍、所々に火災を起すに至れり。

大使館前にありし軍馬一頭、破片に當りて戰死す。

夜に至るも砲擊熄まず、終夜繼續せられたり。

九月十七日。晴。

朝來熾烈ならざるも間斷なき砲擊なり。

今朝のラヂオは、昨十六日午前八時降伏勸告に獨軍の軍使來りたること、司令官「チユマ」は之を拒絶せること、午後三時十分、獨軍は更に飛行機より三百萬枚の降伏勸告ビラを撒布し、十二時間の期限を附せること等を報じたり。

獨軍の包圍圈愈々緊縮せられたるは明かなるも、爾他の情況全く不明なり。

午後に至り砲擊益々激烈となり、その一彈は大使館の横約十米の所に落下す。

又大使館の近傍に波軍砲兵陣地を布き、之に對する獨軍の集中射擊又猛烈にして、爲にさしもの大使館も時に地震の如く震動す。

ラトビア武官より赤軍が國境を越えて前進せる旨通報あり。

眞實なりとせば一大事なり、果して如何。

夜九時のラヂオは、在ワルソー外交官並に中立國の住民の避難に關し、ポーランド側より交渉のため代表を送るべき旨、ドイツ側に呼びかけあり、或は吾人亦急遽移動を要すべき事あるを豫想し、大急ぎにて荷物の支度並に更に機密書類の整理をなす。

英國のラヂオに依れば、赤軍の國境を通過して前進したるは、愈〻事實なるが如し。

九月十八日。晴。

朝來昨日に比し平靜なり。

獨軍はワルソーを力攻せざるが如し。又事實その必要なかるべし。

昨日の外交折衝は成功せざりしが如し。最早ワルソーの陷落目前に迫れる今日、强ひて避難するの必要もなかるべし。

ソ軍は「ポーランドの政府既になき今日、白露及びウクライナの同胞を救ふは吾等の義務なり」との聲明を發し、本格的に進軍の開始せる旨報道せり。

哀れなるかな、ポーランド。遂に第四次分割の憂目に遭ふにあらざるか、最早如何なる意味よりするもこれ以上の抵抗は無意味なり。

夜に至り獨ソ兩軍は、既に「ブジエシチ」に於て相互連絡せる旨を報ず。

九月十九日。曇。

朝來比較的平穩なり。

ラヂオは「クトノ」附近にて捕虜五萬、「ルボフ」附近にて約一萬なる旨を報ず。

各方面の戰況は、逐次片附きつゝあるものゝ如し。

九月二十日。晴。

この日亦大なる變化なし。

砲撃は緩徐なるも、間斷なく繼續せられあり。

大使館の近傍のガソリン・タンクに砲彈命中し、猛烈に炎上す。

外交團避難の交渉は如何になりたるや、その後何等の消息なし。

大使、武官の一行と連絡全くなし。ソ軍の進出せる今日、大いに憂慮せらる。

九月二十一日。晴。

午後一時頃に至り滿洲國領事館より電話あり、例のラヂオに依る避難の交渉成立し、本日午後二時より午後六時迄の間に戰線を通過し避難すべしとの事なり、全く唐突なり。直に外

交團長のノルウェー公使にその眞僞を確めたるに事實なり。今迄何等の通報をなさず、將に置き去りを受けんとす。全く怪しからざることなり。大急ぎにて出發を準備す。自動車は五臺ありたれど運轉手なし。ポーランド人の運轉手は同行を肯ぜず、已むを得ず小生も亦一臺を自ら運轉し、辛うじて三臺にて出發す。この際つくづく自動車操縱術修得の何人にも必要なるを痛感せり。

午後四時頃「シジム」街道上兩軍の停戰地區より獨軍側に移動す。停戰區域は道路の兩側各〻千米なり。他の地區にては盛に砲擊の應酬あり。從つて大使館を出發し「プラガ」を經て「ラジム」に行く途中は、到る處盛に砲彈落下し危險極まりなし。ヒヤヒヤし乍ら漸く該休戰地點に達す。我等を送るポーランド兵は手を振り、迎ふるドイツ兵も帽をとり、和やかにして悲壯なる狀景なり。兩軍ともその態度頗る紳士的なるに感心す。

外交團の自動車全部の集結の終りたるは午後九時頃なりき。それより惡路を衝き、何處に行くやら全く不明の前進を開始す。

正午頃「ムラワ」南方の某村落に達す。同地よりは既に汽車開通しあり。外交團の一行は同地にてベンジンの補給を受け、更に夜行軍を續行し、翌二十二日午後二時頃漸く「ケーニヒスベルグ」に到着し、逃避行を完了せり。

（籠城日記終）

三　戰後の情況

一　占領地內の行政

玆に占領地に於ける占領地行政、かういつた方面を主にして、ワルソーの情況を述べることにする。被占領地の國民の實に悲慘なものであることは云ふまでもない事であるが、私がポーランド國民の悲慘な狀態を直接目擊した時には、如何なる手段方策に出ても戰爭を始めたならば必ず勝たなければならぬ。負けてはならぬ。理窟は後で如何やうにもつくから、何としても戰爭には勝たねばならぬと痛切に感じた次第である。

獨軍の占領地行政の要領は極めて峻嚴なものであつた。恩威並び行ふといふ事があるが、ドイツのポーランドに對するそれは主として威に依つて行つて居るのである。勿論非常に巧みなところもあつて、抑壓すると同時に又ひよつと息を拔き民心を緩和するといつた巧みな

ところもあつたが、大體に於て峻嚴そのものであつた。占領地内の治安維持のためには次の如き法令も出てゐた。例へば獨逸兵一人を殺すとか狙撃したならば、三十人のポーランド人を死刑に處すといた工合で、而もこの峻嚴な法令を文字通り實際に實施してゐたのである。

これを要するに、占領地行政と云ふものは、これを行ふ國民が被占領地の國民に比して優秀であれば、默つて居ても行はれるものである。卽ちドイツ國民と云ふもの丶優秀さがこのポーランドに於ける占領地行政を極めて容易ならしめて居るのであつて、實際ポーランド人は、獨逸人に對しては敵乍らも其の民族の優秀性に敬服して居るのであつて、從つて相當苛酷な政治を布かれても爲方なく默々としてこれに服從せざるを得ない有樣である。この點は吾が日本としても深く心得べきことであつて、その意味は全く異ると云へ、吾々が東亞共榮圈を確立せんとするに當り、或は滿洲において、或は支那において、或は又南方において、此處に働き此處に住む日本人が、彼等に對し優秀なるものであつて、彼等に與へて模範とするやうな國民であつたなれば、これ等東亞共榮圈の建設は期せずしてこれを行ふことが出來

るのである。然るにこれに反し、彼の地に働き彼の地に住み、彼等と接觸する日本國民にして彼等の爪彈きを受けるやうな者共であつたなれば、如何に我が有識者達が彼等との提携親睦を圖り、東亞共榮圏建設の大理想に向つて進まんとしても、決して彼等の信服を得て立派にこれを完成することは出來ないのである。この點に關しては後述する如く、國民の教養といふものがその根本義をなすものであつて、我が日本國民の眞の大國民たる教養を高めることが實に急務中の急務たる所以である。

二 ドイツ軍の軍規

次にドイツ軍の軍規に就て述べる。私が占領地に行つたのは、第一回が十月十四日で、一週間滯在した。第二回目は十二月一日で、それから歸朝するまで約半年間、ワルソーに滯在

してドイツ軍の狀況を實際に視察したのである。實に占領地內に於けるドイツ軍の軍規が嚴肅で、忠實に恪守されてゐることには、衷心より敬意を拂はざるを得なかつた。ワルソー方面に來てゐるドイツ軍は第二流の兵隊であつて、大體年の頃三十歲前後からそれ以上と思はれる兵隊が大部分で、日本で云へば豫備、後備の兵隊で、決して第一流の兵隊ではなかつた。この日本で云へば豫備、後備の兵隊の占領地に於ける軍規といふものは、實に嚴肅なもので、文字通り秋毫も犯すなしと云つた立派なものであつた。從つてポーランドの住民は、意を安んじてドイツ軍に委せてゐる。ドイツ軍を信賴してゐる。勿論このドイツ軍の秋毫も犯すなしと云ふのは、地方住民に對し何等犯すなしといふのであつて、その外に對內的、つまり軍隊內に於ても實に軍規が嚴肅である。例へば道を步いてゐる時の兵隊等が上官に對する敬禮、これなども實に立派に確實に行はれてゐる。これは私の實際に經驗した事で深く感服したことである。或る時私は用事があつて占領地の軍司令官のところに面會に行つた。步哨その他のところに行つて名刺を出し身分を示して面會を求めるのである。勿論軍服で行け

ば、默つてゐても立派な敬禮を受ける。内を案内してくれる下士官以下が我々に對しても、自分の上官に對すると同じ態度で對する。背廣を着て行つた場合でも、名刺を出して日本の武官であることが分ると、不動の姿勢を取つて敬禮し、上官に對するやうな敬意を拂つて案内をしてくれる。實に立派なものである。まして直屬上官に對する態度の如きは、全く立派なものであつて、實際に見てゐると、私共が中隊長をしてゐた時、中隊に編入して來た初年兵が私共に對する態度、これと全く同じであつた。それも三十、四十になる日本で云へば相當年輩の豫備、後備がさういふ立派な態度で、若い下士官、將校に、而も戰時占領地に於て對してゐるのである。私は何故にドイツの軍隊の軍規がかくも立派なものであるかについて考へてみた結果、その結論は、ドイツ國民の教養の程度が本當に高いからであるといふことに到達した。玆に教養と云つても、インテリといふ意味ではなく、眞の教養の意味である。國民としての、眞に國家精神に基いた眞の教養が高いからである。卽ち軍規の何物であるかをよく理解してゐるからである。實際にドイツの兵隊の教養の高いこと、ドイツ國民の教養

の高いことは周知の事實である。面白い話がある。ワルソーにドイツ軍が入つて來て、街を散歩してゐた。最初ワルソー市民がドイツの兵隊を見た時、これをドイツの將校だと思つた。とワルソーの市民は云つてゐたのである。御存知の如くドイツの兵隊は立派な服裝をしてゐる。恐らく兵隊の服裝としては世界中で一番綺麗であると思ふ。日本や他の諸外國の兵隊の如く、身につかないだぶ〲の服ではなく、しつかり身に合つた服を着て立派な服裝をしてゐる。帽子も綺麗な帽子である。私も初めてベルリンに行つた時は、矢張り將校だと思つた位に立派な服裝をしてゐた。體格が堂々としてゐる。姿勢も態度も立派である。話をしてみると教養が高く立派な國民である。ワルソーの市民がドイツの兵隊を將校であると思つたのは無理もない話である。これは私の實感であつて、如何に國民の教養といふものが軍隊を強くするか、如何に軍規の正しい軍隊といふものが戰爭に強いかといふことは、間違ひのないところであつて、その根源である軍規を嚴肅にするには、國民の教養を高めること、これ以外にはないと思ふ。日本の軍隊の軍規　考へてみて、ドイツの軍規と比較し、誠に自か

らを顧みなければならぬところがあると思ふ。要は國民の教育である。國民の教養を高めることであると思ふ。

三　對ユダヤ人政策

ナチスの對ユダヤ人政策は、本叢書中の「ナチスのユダヤ政策」に於て詳細に述べられることであるから、茲では一寸ナチスのポーランドに於けるユダヤ人に對する態度に就いて、見聞の一端を述べることにする。

ナチスのユダヤ人に對する政策は、徹底的に思ふ通りに峻嚴に實施してゐる。ユダヤ人は悉く腕章を卷き、その腕章に例のユダヤ人の印である水色の星形を大きく出し、それをつけなくては一歩も外に出ることが出來ない。ポーランドのユダヤ人の商店の飾窓には、必ず大

きな水色の星形のマークが貼つてあつて、彼等はなかなか電車にも乘れない。クラカウに於ける所見であるが、クラカウの電車は二輛連結してあつて、その二輛連結の後方に數座席を仕切つて、共處にだけユダヤ人が乘つてもよい、入口はこれだけと書いてある。從つてそれ以外の座席には乘れないのである。映畫劇場などは悉く出入禁止で、レストラントもユダヤ人お斷りと書いてある。また財產の如きは直ぐ沒收してしまふ。實に悲慘な狀態であつた。

私もその峻嚴さに驚き、見るに忍びず、ポーランド人に、ユダヤ人は可哀さうではないか、それほどまで虐待しなくともよいではないだらうかと訊ねてみた。ところが案外な返事で、ポーランド人はユダヤ人を虐待するのを喜んでゐるのである。これは大勢の人に尋ねて確めたことであるから間違ひのないことで、或るポーランド人はかう云つた。「おれはヒトラーは嫌ひだが、唯一つ感謝することがある。それはユダヤ人をこんなにやつつけてくれたことである」と。

何故にポーランド人は喜ぶのであるかと云へば、如何にポーランドが今日までユダヤ人に

苛めつけられてゐたか、如何にユダヤ人から搾取されてゐたか、しかも今日國家の恩惠を受けるだけ受けてゐながら、國家の危機に際して悉く國外に逃避してしまつたことを想へば、容易に理解することが出來ると思ふ。ユダヤ人はポーランドのためには何一つ働いてはゐないのである。外相ベックの如きもユダヤ人である。私は、ナチス獨逸が、ポーランドの國民性、國民の意向といふものを、斯ういふところまで研究してユダヤ政策を實施してゐるものと思ひ、その用意周到なるには感服する他はなかつた。

結論

以上甚だ概略ではあるが、私が實際のドイツの戰時下の狀態、獨波戰爭、ソ芬戰爭の實情も視察したの體驗を骨子として、ナチス・ドイツの實戰場裡の活動を述べたのである。

顧つて支那事變を契機として東亞の新秩序を建設し、東亞共榮圈の確立に邁進してゐる日本の現狀を顧る時、幾多の點に於て多々憂慮に堪へない方面があることに注意しなければならぬと思ふ。如何なる方面に於て日本が戒心すべきかは、本論を讀まれた方々はに自ら御了解されたことゝ思ふので改めて述べないことにする。

併し現下の日本の使命は重大である。この重大なる使命を達成し、國家を盤石の安きに置き、皇國日本の世界的光輝を考ふるとき、結局國防國家の完成が緊急の要務である。これを

達成するには、結局のところその根源は日本國民の本當の教育教養にあると思ふ。何を措いても速に先づ日本國民の敎養を高めなければならぬ。國民の眞の敎養が高ければ、共國は自然と强くなる。ただ玆に言ふ敎養とは所謂「青白いインテリ」ではなく、眞の意味の、敎養を言ふのである。世上ではよく「インテリ」は弱いと言ふが、之は全く皮相の觀察である。眞に敎養の高い國民が强いのは、今度の獨逸軍の狀態を見れば明瞭な事實である。即ち富國强兵の實を擧げる爲には何よりも先づ國民を立派に敎育することが最も大切な事であり、而も之れが一見遠廻りの樣で、實は最も近道なのである。要するに、現代の戰爭に於いても、結局精神の問題である。卽ち我が世界無比の大和魂を益〻鍊磨することが肝要なのである。然り而して、この日本精神をして其光彩を發揮せしめるにはそれに相應する文明の利器を持たせなければならぬ。現時の科學の進歩せる時に於て特に然りである。精神と同時に機械力物質力を輕視してはならぬ。否大いに重要視しなければならぬといふことは、ナチス・ドイツの實戰を見て痛切に感ぜざるを得ないところなのである。

實職場裡のナチス獨逸

昭和十六年五月五日印刷
昭和十六年五月十日發行

——（¥0.60）——

著作者　於田秋光

東京市神田區神保町三丁目一三
發行者　北原鐵雄

東京市神田區神保町三丁目二七
印刷人　大庭公平

東京市神田區神保町三丁目二七
印刷所　株式會社 法文社印刷所

東京市神田區神保町三丁目一三
發行所　アルス
電話九段二一七五・二一六七、
振替東京二四八八八番

・ナチス叢書・

戰爭文學會編

世界戰爭文學全集

全二十五卷

*第一卷　イリアス（トロヤ戰爭）　ホメロス
*第二卷　ギリシヤ・ペルシヤ戰爭　ヘロドトス
*第三卷　ペロポンネソス戰爭　ツキヂデス
*第四卷　ガリア戰記　シーザー
*第五卷　アイネイス（羅馬建國戰爭）　ヴェルギリウス
*第六卷　ロオランの歌（回教戰爭）
*第七卷　ニーベルンゲンの歌（中世亞細亞・歐羅巴戰爭）

＊第八卷　アーサー王物語（騎士道戰爭）
＊第九卷　解放されたエルサレム（十字軍戰爭）　タッソー
＊第十卷　英國世界征覇序曲　シェークスピア
＊第十一卷　宗教戰爭　ダンテ・ルーテル・ミルトン
＊第十二卷　佛蘭西王朝戰爭　コルネイユ・ラシイヌ・セヴィニエ夫人
＊第十三卷　シャルル十二世（北方戰爭）　ヴォルテール
＊第十四卷　三十年戰役史　シルラー
＊第十五卷　エグモント（和蘭獨立戰爭）　ゲーテ
＊第十六卷　タリスマン（十字軍戰爭）　スコット
＊第十七卷　サルダナパラス（アッシリア滅亡戰爭）　バイロン
＊第十八卷　オットー大帝（神聖羅馬帝國戰爭）　キーツ

*第十九巻　世紀の傳說（人類闘爭史詩）　ユーゴー

*第二十巻　ナポレオン戰爭　ラスカーズ・ショー・ハーディ・ゲーテ・トルストイ
バルザック・ムッソリーニ・ユーゴー・スタンダアル

*第二十一巻　壞滅（普佛戰爭　上・下二巻）　ゾラ

*第二十二巻　ピョートルとアレクセイ（北方戰爭）　メレチコフスキイ

*第二十三巻　南北戰爭（上・下二巻）　シンクレア

*第二十四巻　第一次歐洲大戰　編輯

*第二十五巻　世界變革戰爭　編輯

各巻解說

歐洲戰爭文化史　歐洲戰爭經濟史

歐洲戰爭科學史　歐洲戰爭藝術史

歐洲戰爭文學史（戰爭文學會編）

附錄

戰爭文學（戰爭文學會々報）